

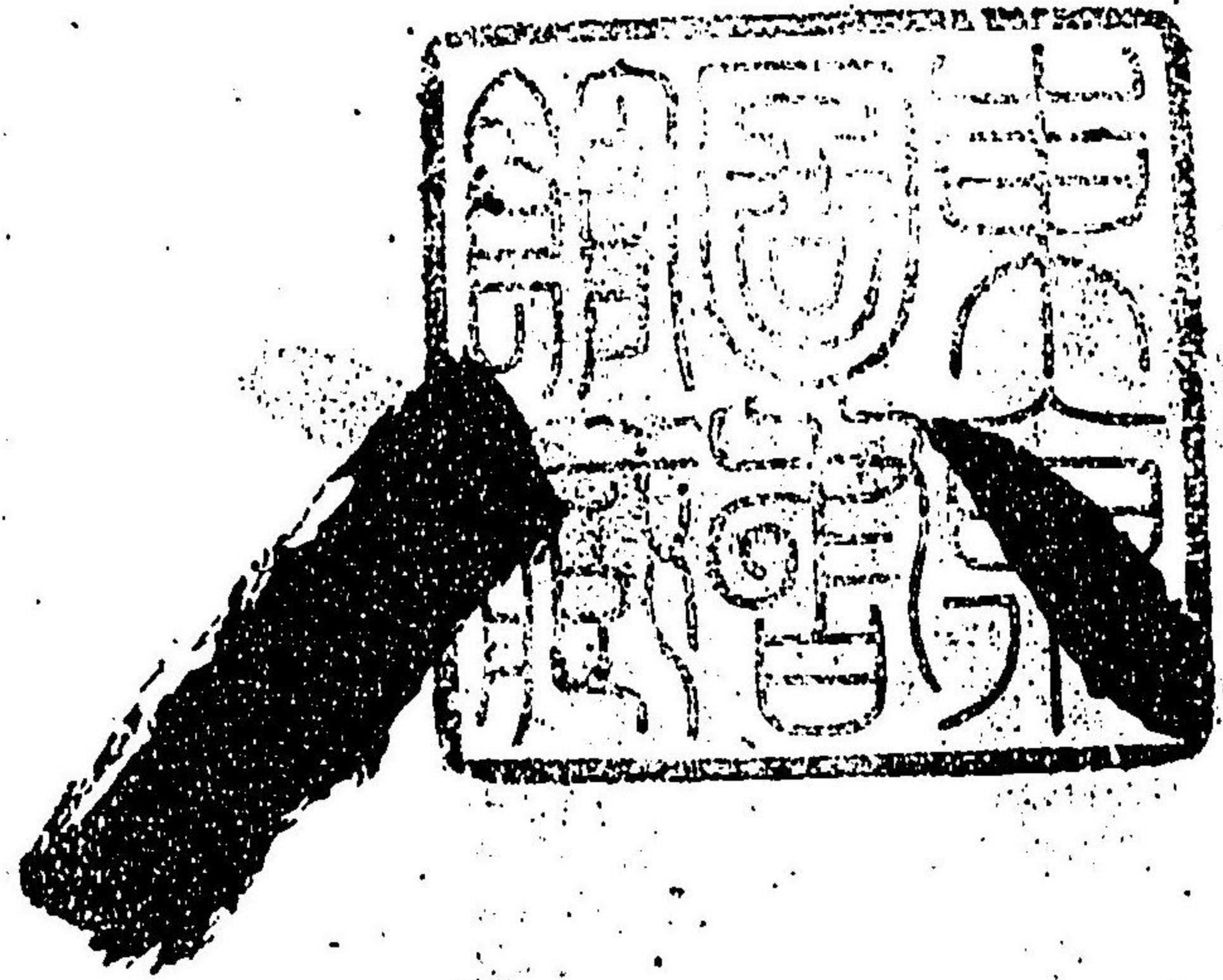
五ノ九

皇女之神德

小佐野文炳 同輯

永田宿直

No 15508



天
地

海嶽龍王像

一
心
於
此
心
也



天
海
心
日
月
水
火
土
金
木

天
地
人
物
萬
物
皆
有
靈
氣

新編 富士の神徳目録

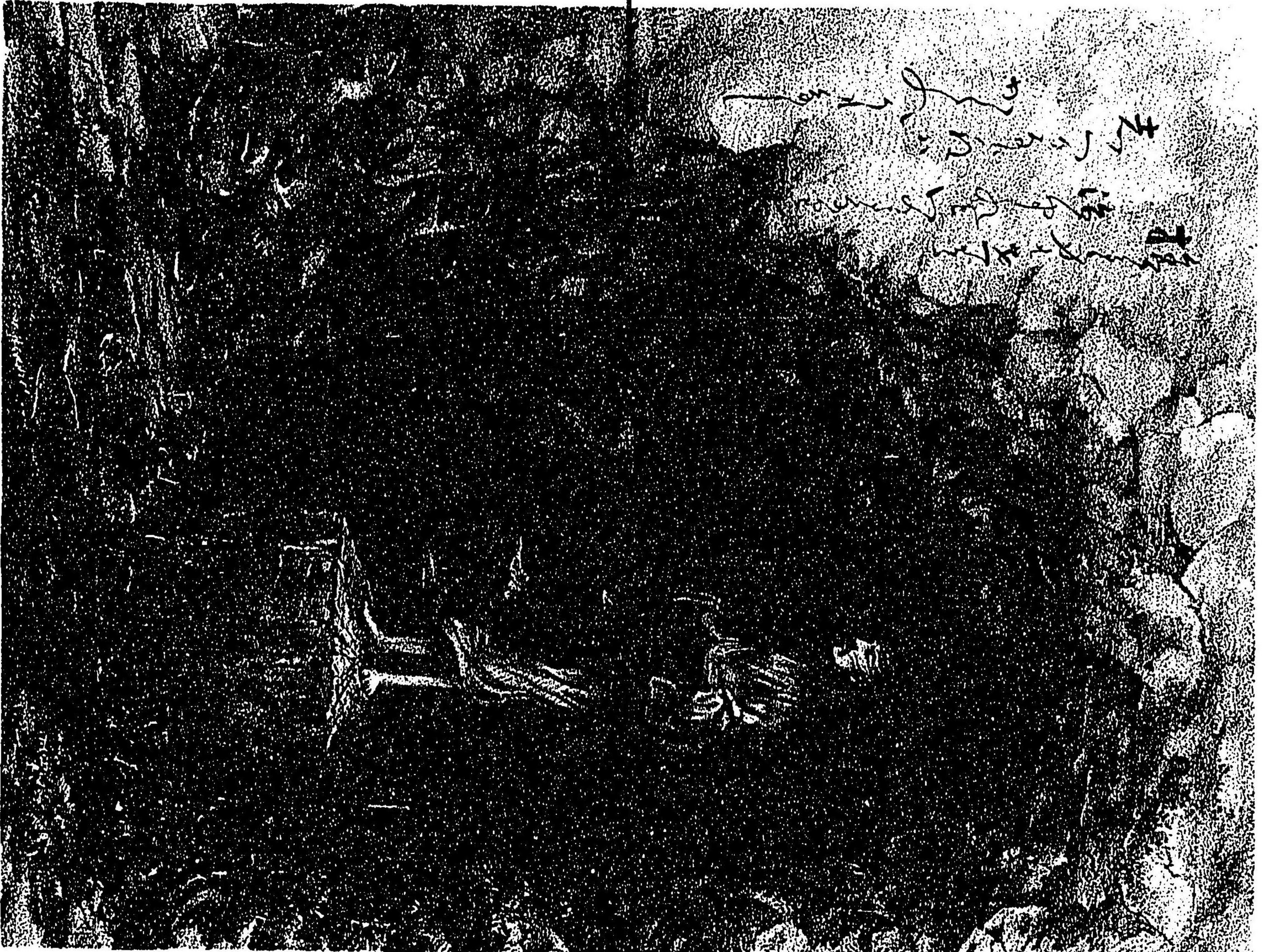
富士の神徳目録

- (一) 元祖角行尊師御一代記……………一丁
- (二) 飴屋勘吉が母の話……………三十七丁
- (三) 細野香二郎の話……………五十三丁
- (四) 富士山中宮小御岳神社焼失の話……………五十九丁
- (五) まつ女の話……………七十三丁
- (六) ふじ女の話……………九十一丁
- (七) 秋葉直二郎の話……………百一十一丁
- (八) 富士山七ふしぎの事……………百二十二丁

目録終

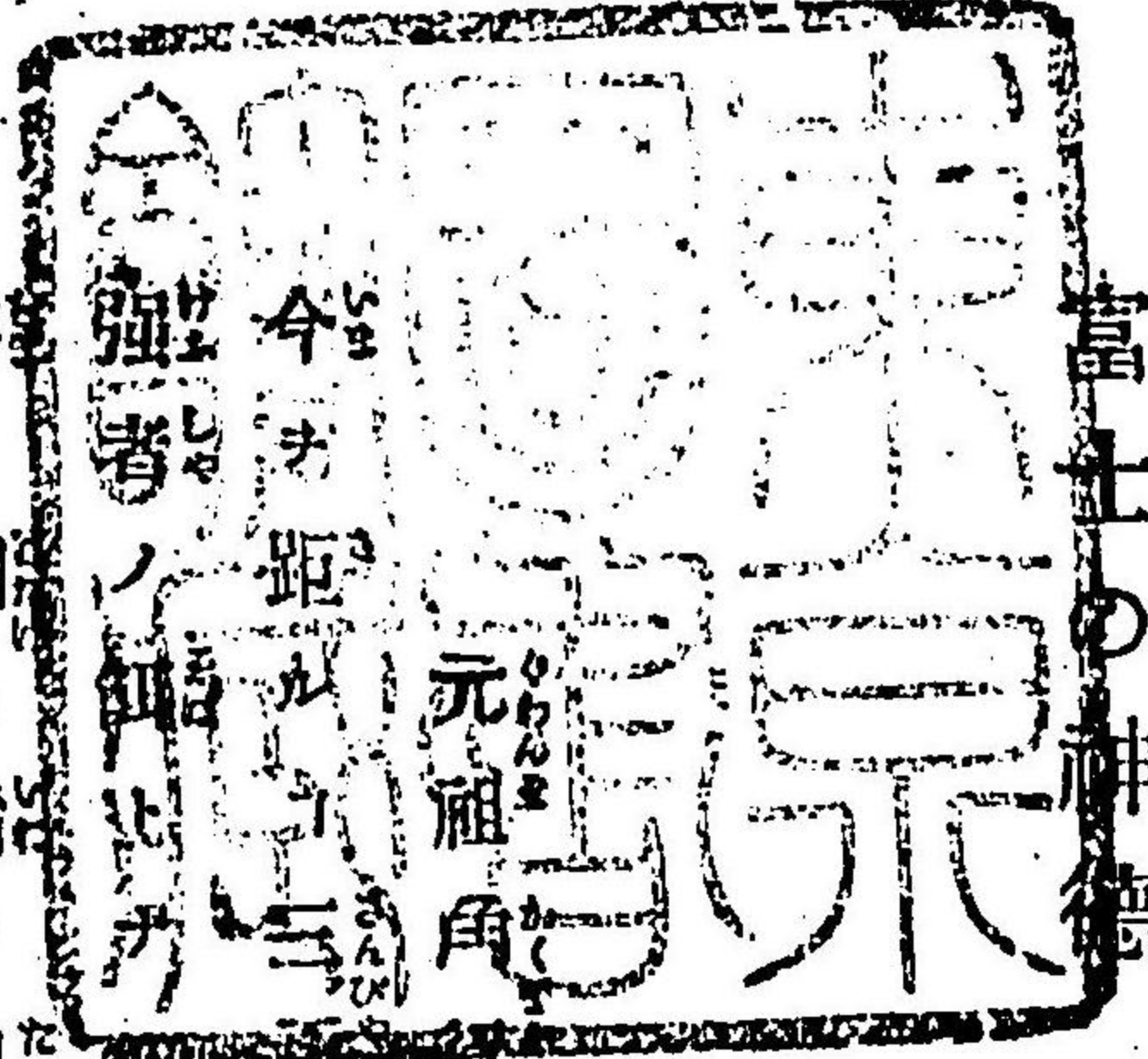
[Faint, illegible text on the left page of the spread]

[Faint, illegible text on the right page of the spread]



神田區東松子町十六番地小笠原傳印行

圖 スナヲ行大師尊行角 = 中ノ穴人



富士の神徳

元祖角行尊師御一代記

今チ距ルハ三
 強者ノ血ハ
 麥ノ畑モ稻ノ田モ脩羅ノ巷ト變リ來テ血潮ハ流レテ川
 ト爲リ屍ハ積テ山トナリ世ハ刈蒺ト乱レ果テニキ〇然レ
 ハ其頃ハ日本二十四天下トモ云ヒテ九州ニモ五家ノ豪
 族アリ大友豊後守ハ豊前豊後筑後ノ三國チ秋月筑前守
 ハ筑前一國チ龍造寺ハ肥前一國チ菊地肥後守ハ肥後一

羽田宿直
小佐野文炳
同輯

國ヲ、嶋津薩摩守ハ日向大隅薩摩ノ三國ヲ領地トナシ、孰
レモ兵馬ニ氣ヲ凝シ、競フテ武勇ヲ争ヘリ。然ル程ニ大友
豊後守ハ筑前へ使者ヲ以テ速ニ我ニ降参スベシト言ヒ
遣シタルニ、秋月筑前ノ守ハ大ニ怒リ、忽チ激シキ戰ト爲
リシガ、終ニ大友ノ爲メニ打敗ラレタリ。勝誇リタル大友
氏ハ、再び肥後へ使者ヲ立テ、我家ニ降ルベシト云ヒ遣リ
タルニ、因リ、天正三年又々菊地氏トノ大戰爭ト爲リシガ、
肥後方ノ戰ヒ利アラズシテ、肥後守ハ自殺シテ果テタリ、
富士御法家ノ始リハ、眞ニ此ニ基ヒスルモ、亦不思議ナル
事トモナリ。其頃、肥前嶋原ヨリ西ノ方十八里ガ間ヲ領地
トセル、長谷川左近太輔藤原久光ト云ヘル大名アリシガ、
菊地氏ノ末家ナリ、昔シ源頼朝將軍タリシトキ、菊地氏ハ

朝ノ一字ヲ賜リテ、武朝ト名乗リタルトアルヲ以テ、長谷
川氏ハ武ノ一字ヲ取リテ、名ヲ武久ト改メタリ。然ルニ此
度大友氏トノ大戰爭起リシカハ、御一家ナレバ武久殿モ、
家勢舉テ出軍セシモ、御武運拙ナク坐マセシニヤ、終ニ大
友氏ノ爲メニ打敗ラレタレバ、長谷川左近太輔殿ハ領地
ナル長崎ノ邊リニ忍ハセ玉フ、(菊地氏ハ藤原氏ニシテ、紋
ハ下リ藤ナリ、長谷川ハ之ヲ畧シテ、藤ノ丸ノ紋ヲ付ケ玉
フ、故ニ我が富士ノ教祖方ハ、藤ノ丸ヲ以テ教法ノ紋トセ
リ)武久公ハ固ト我が日本ハ神國ナレバ、神ノ御威徳ヲ以
テ、天下ノ擾乱ヲ救フニ若カシ、余モ未ダ嫡子モナケレバ
一子ヲ設ケテ、菊地長谷川ノ家名ヲ興サセタキ者ナリト
切ニ思召サレ、天文六年三月十五日ヨリ、同九年三月十五

日マテ、三ヶ年ガ間水行ナサレテ、太祖參神ヲ祈ラセラレ
 マリ、倍テ水行モ恙ナク、濟ミタレハ、復心ノ家來七八人ニ
 酒ヲ賜ハリ、武久殿御夫婦モ睡リニ就キ、玉ヒキヤガテ、與
 方ニハフト起キ出テ、夫武久公ニ向ヒ、妾只今奇シキ夢ヲ
 見マリ、天下ヲ平グルモノハ、天正五年正月元日、尾張國
 ニ生レマリ、又天下ヲ能ク治ムル者ハ、三河國ニ生レタリ、
 因テ汝ニモ亦一子ヲ授クベケレバ、能ク護リ育テ、他ノ
 二人ト力ヲ協セ、行法ノ徳ニテ、世ノ擾亂ヲ救ハシムベシ
 ト、音物シテ北斗星ハ妾ガ腹中ニ入レリ、是レ正シク神様
 ノ御告ゲナルベシト申シケレバ、武久殿モ幾度トナク感
 歎シ、余モ亦夫レト同シキ夢ヲ見テ、今シモ目ヲ覺シタル
 ナリ、下仰セラレ、御夫婦トモ限リナク、御感喜遊ハサレシ

ガ翌天文十年正月十五日辰ノ刻、恰モ神ノ御告サ蒙リシ
 ヨリ、十月日ニシテ、玉ノ如キ御男子、御出生坐シマセリ。我
 ガ元祖角行尊師即チ是ナリ。御兩親ノ喜ビ言ハシ方ナク、
 武久ノ武字ヲ與ヘテ、御幼名ヲ武松君ト呼ビ給ヒキ。同
 十六年正月七日ノ夜、武松君ハ夢ニ感シテ、神理ノ最モ貴
 キ丁チ知リ玉ヒテヨリハ、常ニ神様ニ仕ヘ奉ル狀ヲ爲シ
 テ、見戯ノ事ト爲サレマリキ。是レ實ニ尊師ガ七歳ノトキ
 ニテ御在セシナリ。武松君ハ最ト健ニ渡ラセラレ、風邪一
 ツ召サレバシテ、御成長遊サレケレバ、光陰ノ數モ多ク經
 テ、永祿元年トモナリヌレバ、尊師ハ最早十五歳ニモナリ、
 御元服ノ御祝アリ名ヲ武邦ト御改メ遊ハサレシハ、正月
 十五日ノ事ナリキ。此日武邦君ニ尊師ト書ハ單ハ、恭シク兩

親ノ前ニ手ヲツカヘ一謹テ惟フニ、今ヤ天下ハ麻ノ如ク乱
 レ、郡雄ハ雲ノ如ク起レリ、若シ此儘ニテ過ギタランニハ、
 何レノ世ニ至リテカ、上ハ至尊ノ徽慮ヲ安シ奉リ、下ハ億
 兆生民ヲ塗炭ノ中ヨリ極ヒ得ラルベキ、是ヲ以テ不肖一
 心ヲ勵シ、神祇ノ威徳モテ能ク諸人ノ精神ヲ和ゲ、以テ國
 ノ擾乱ヲ救ヒ奉ル爲メ、永ク諸國ノ山川ニ大行セマシ存
 ズルナリ、憐レ此願望ヲ遂サセ玉ヘト、涙ヲ流シテ申上ケ
 レバ、御兩親モ固ヨリ望ム所ナレバトテ、早速ニ御暇ヲ下
 サレケレバ、同シキ月ノ十八日早朝ニ、尊師ハ何時歸ルベ
 キ豫期モナキ、永ノ旅路ヘ唯一人、心強クモ出向ハレ給ヒ
 又、夫ヨリ尊師ハ大和國大峯山ニテ、二七日ノ御修行ナサ
 レ、伊勢ノ大廟ニ詣テ、東海道ヲ下リ、常陸國茨城郡水戸ノ

御城下、藤柄町ノ行者金行ガ家ニ到リ、心ノ底ヲ打明シテ、
 願ミケレバ、金行モ其志ヲ感シマリケン、快ク諾ヒタレ
 バ、尊師ハ名ヲ甚平ト改メラレ、三年ガ間此家ニテ神祇ニ
 事ヘ、同三年庚申二月尊師ハ金行ニ暇ヲ乞ヒタリキ。夫ヨ
 リハ陸奥國岩井郡脱骨ノ窟ニテ、三日ノ間御斷食ニテ御
 修行遊ハサレ、終リテ又三七日間穀物不食ノ御修行ヲ遊
 ハサレシニ、或夜一人ノ年若キ女子、膳ノ上ニ麗シク盛リ
 並ベタルヲ捧ケ來リ、飯喫リ給ヘト、種々ニ勸メタリ。尊師
 ハ行中ナレバ取合ヒ給ハズ、次ノ夜ハ又モ年老ヒタル女、
 鉢ノ中ニ餅ヲ積重キテ持テ來リ、コレ味ヒ玉ヘヤ、ト様々
 ニ勸メタリシガ、尊師ハ前ト同シク少シモ受附給ハザリ
 シ。其翌晩ニ至リテ、又モヤ一人ノ行者トモ見ユル者、握リ

タル飯ヲ携へ來り、強テ勸メ參ラセメレド、尊師ハ目ニモ
 懸ケ給ハザリシ。二七日目ニハ、先夜ノ行者又來リテ、ツト
 尊師ノ面前ニ、生首ヲ突出シ、汝強情者ナリ、生首ハ五穀ニ
 アラズ、イザ食へトテ、尊師ニ擲附ケタリシモ、尊師ハ自若
 トシテ毫モ懼ル、氣色アラセラレザリシ、御修行ノ終ノ
 夜ニ至リ、最年老タル行者現ハレ出テ、足下ハ何故ニ、如斯
 ル大行ヲ爲シ給フヤト問ヒタリ、尊師答ヘテ、我ハ兩親ノ
 願望ヲ亞ギ、國家ノ安寧ヲ祈ルモノナリト仰セ給ヘハ、行
 者ハ急ニ容ヲ改メ、其ハ實ニ善キ念願ナリ、左ホドノ大望
 ハ、此處ニテハ成就スルヲ難カルベシ、是ヨリ西南ニ方リ
 テ、富士ト云ヘル御山アリ、此御山ハ神仙ノ遊集給フ靈場
 ナレバ、萬ツノ物ノ始メナル子ノ方ヨリ此御山ニ登リテ、

教法ノ基ヲ開カルベシ、然爲スルハ、足下ノ願望モ協ヒ申
 サシト、言ハレニキ。尊師ハ是ツ太神ノ御告ナラント思ヒ
 ケレバ、深シ神徳ヲ謝シテ窟ヲ出テ、常陸ノ國鹿島ノ浦ノ
 荒波ニ、心モ体モ幾度カ潔ガ上ニモ潔カレト洗ヒ清ムル
 御水行ヲ爲シ玉ヒ、ヤガテ富士山ノ子ノ方ナル、甲斐國都
 留郡上吉田村(今ノ福地)ヨリ祈願ノ經文唱へツ、中宮マ
 デハ登リ給ヒヌ。頃シモ四月八日ノ一ニテアリケレバ、麓
 ノ風スラ身ニ染ミ渡リ、他國ノ寒中歎トモ疑ハル、程ナ
 ルニ、名ニ負フ富士ノ高山ナレバ、五合目ヨリ上ハ、唯一面
 ノ白雪ニテ、斷崖絶壁ノ側面ナラデハ、黒キ色ノ物アラザ
 リケル程ナレバ、如何ニ尊師ガ一心ナレバトテ、何條登リ
 得ルベキ。因テ尊師ハ此處ニテ三七日ノ御修行爲サセテ

レシニ、同月廿八日夜、孰レトモ知レズ、微カナル聲ニテ、汝
此處ニテ、如斯大行チナスハ何故ニヤト問フ者アリ、尊師
ハ再拜シテ、我ハ兩親ノ願望チ亞ギ、國家ノ安寧チ祈ル者
ニテ候ヒヌト申シ上レバ、又モヤ聲シテソレハ實ニ善キ
念願ナリ、左ホドノ大望ハ、此處ニテハ成就シ難カルベケ
レバ、中道ト云ヘル行場チ、七度回ルベシ、然ルトキハ汝ノ
願望モ徹底ナルベシト、夫レカアラヌカ白雲ノ、木ノ間チ
出ヅル方ヨリシテ、サモ滑ラカニ聞ヘケル中ニ、忽チ一頭
ノ山猿ハ尊師ガ前チ横ニ過ギ、東ノ方ニ歩ミ行キケリ、尊
師ハ一層感激シテ、是ツ正シク太神ノ御告ニテ、如斯我チ
導キ給フナルベシト、思ヒ、彼ノ山猿ノ後ニ從ヒ、御山ノ中
央チ左ニ回リ始メ、閏四月ヲ中コシテ、五月十七日マデ、七

七四十九日ガ間、木ヲ見テ、木ヲ踏マズ、草アリテ、草ヲ踏マ
ズ、有稱澤ヲ八百八澤、無名澤ヲ八百八澤、千尋ノ懸崖ノ大
澤ノ石ノ灘一ノ越トモ云フチモ、神竜ノ御守護モテ、六度
トモニ渡リ過ギ、今七度目ヲ越ヘントナス、ト西ノ麓
チ瞰セ給ヘバ、巖ヒク紫雲ノ中ニ奇シク光明アリテ、大空
ニ輝キメリ。尊師ハ伏シ拜ミテ、熟其ガ場所ヲ認メ、置キ、急
ギ小御岳神社ニ詣テ、御中道ノ修行、七回マデモ恙ナシ、果
サセ給ヒシ徳チ神ニ謝シ奉リ、夫ヨリ大澤ニテ拜ミタル
地ニ方角チ取リ、木ヲ攀ヤ石ニ傳ハリテ、西麓ノ稍平地マ
デ下リシガ、トアル人里ノ邊リニ、入口ノ圓サ一丈許リニ
シテ、奥ノ方ハ、最トクキ一ツノ靈窟チ見タリ。尊師ハ是
レ即チ光明ノ發セシ處ナラント察シ給ヒケレバ、里人ニ

向ヒ、吾ハ靈窟ニテ修行セハヤト思フナリ、此處ハ何國何
 郷ナルヤヲ教ヘ給ヘト仰セケレハ、年老ムル農夫、忽チ兩
 眼ニ涙ヲ浮ベテ、如何ニ行者ナレハトテ、勿体ナキ丁仰セ
 ラル、者カナ、抑モ此處ハ駿河國富士郡ニシテ、彼ノ靈窟
 ナハ人穴ト申シ奉ル、因テ此ノ郷チ人穴村ト名ケ候ヒヌ、
 昔征夷將軍源賴朝公、富士牧狩ノ時、仁田四郎忠常ハ、從僕
 二人ヲ具シテ、此御穴ニ入ラントセシニ、俄ニ奧ヨリ大風
 ノ吹キ來リテ、入ルト能ハザリキ、忠常ハ再拜シテ、我レ一
 己ノ志意ヲ以テノ故ニアラズ、主命止チ得サルニ由ルナ
 リト言ヒケレバ、風ハ則チ止ミタリ、因テ三人共奧ニ入リ
 シガ、五六町モ行キタリケント思フ頃、此中ノ様子必ズ語
 ルトナカレト、太神ノ御諭アリタリキ、忠常畏ミテ穴チ出

テ、主君賴朝公ニ見ヘケレバ、公ハ切リコ穴ノ中ノ様子ヲ
 問ハセ給フ、忠常モ始メハ三四度否ミタレド、公ハ仲々聽
 入レ給ハズ、忠常モ今ハ餘議ナシトテ、一伍一什ヲ言上シ
 タリト云フ、夫レ故ニヤ、左シモニ時メキシ賴朝公モ、三代
 ニテ亡ビ、忠常ハ不知所終ト爲リ、二人ノ從僕ハ血ヲ嘔テ
 死シタリトテ、此ノ外ニハ、誰一人トシテ足サ入レタルモ
 ノナシト承ハリヌ、御尊嚴此ノ如シ、然レハ行者様ナリト
 モ妄リニ入ルトハ可シカルマシト、言上ゲタルハ是ゾ、此
 村ノ善左衛門ト云ヘル者ナリケリ。始終ノ容子打聞尊師
 ハ、道理ト思召サレ、身被ナス塲處チ善左衛門ニ問セ給ヘ
 バ、白糸ノ漣コソ御清メニ宜シカルヘシト答ヘヌリ、仍テ
 尊師ハ上井出村ニ赴キテ、千條萬縷練絹ノ塵一點モ胃シ

得又、清キ流ノ白糸滝ノ中ニト身ヲ沈メ、一心ニ灌腦ノ式ヲ行セ給フ、忽チ岸上ニ異様人ノ來リ坐シテ、汝ハ何故ニ如斯大行ヲ爲スニヤト問セ給ヘリ、尊師ハ今マデ斯ノ如キ問ヒテ蒙リシテ、再度マデモアリテ、常ナガラ御導キヲ蒙リタルヲナレバ、敬ンデ又以前ノ如ク答ヘヌリ、其人言フ様、左様ノ大望ヲ遂ゲントナラバ、人穴ノ靈窟ニ入ルコソ可ケレ、昔ト今トハ時モ變リ事モ更レリ、是ク眞ニ靈窟ノ開クル時ノ至レルナリト、尊師ハ素ヨリ願フ所ナレバ、直ニ引返シテ、靈窟ノ中ニ入リ給ヒヌ、實ニ是レ五月十八日ノ夜、四ツ時ニテアリシ。我國創始以來二千餘年ノ久シキ間、仁田四郎忠常等三人ヨリ外ニ、誰一人モ曾テ入りタル試ナキ、靈窟ノ中ニアリテ、尊師ハ切りニ祈願ナシケ

ル時、與ノ方ヨリシテ、貳疋ノ山猿ハ、角ニ削リ成シタル材木ヲ擔ヒ、一疋ノ猿ハ何ヤラン木ノ實ヲ握リ來リシガ、ヤガタ材木ヲハ尊師ノ前ニ置キ、木ノ實ヲハ尊師ニ奉リテ去リタリ、尊師ハ夫レト悟リケレバ、直チニ角木ノ上ニ立チ、彼ノ木ノ實ヲ、白ク見給ヘバ、五味子ナリケリ。明レハ五月十九日ヨリ、向フ一千日ガ間、角木ノ上ニテ立行ヲ爲シ給フ、(角行ノ御稱名ハ之ニ因リテ賜ハリシナリ)此間日々三ツノ山猿來リテ、五味子ヲ奉リシカバ、尊師ハ之ヲ食トシ給ヒヌ、尊師ガ丑年生二十歳ニシテ、角木ノ大行ヲ始メ給ヒシモ、徳川神君ガ寅年生十九歳ニシテ、始メテ戰争ニ向ヒ、丸根ノ砦ヲ敗リ給ヒシモ、豊臣大閣ガ申年生廿五歳ニシテ、信長ガ先陣ノ將トナリ、今川が大軍ヲ桶狹ニ

打敗リ給ヒシモ、皆此十九日ニテアリシモ、亦奇ギナルト
 共ナリキ。
 永祿六年五月、一千日ノ御脩行モ難ナク畢リ、四月初申ノ
 日、太神ノ示顯ニ依リ、明藤開山及ビ、備後大觀妙王觀跡拾
 坊光倫心(如斯世間ニ在リフレザル文字ハ皆尊師ガ行徳
 ニ依リ製リ給ヒシ者ト知ルベシ)ノ御傳ヲ蒙リ、又角行東
 覺ト御名ヲ賜リタリ、尊師ガ大ニ神理ヲ開キタルハ、實ニ
 此時ニ給マリシトゾ。其後ハ富士御登山、御中道御脩行、諸
 國ニテノ御氷行等ハ、數知レヌマデ遊ハサレシ、製字又ハ
 祈願ノ御文句ノ、御傳ヲ蒙リシハ、皆此間ノトニテアリシ。
 天正三年ノ春トモナリヌレバ、尊師モ三十五歳トナリ、久
 シ振リノ近狀伺ヒトシテ、故郷長崎ニ御歸リ成サレ、御兩

親ノ恙ナキ御顔ヲ拜シ、二十一年ガ間ノ御勤メ、神徳ノ炳
 焉ナルト、國家ノ安寧ニナルベキトナド、夜ノ目モ合セヌ
 マデニ、御物語爲サレシカハ、御兩親モ、殊ノ外御歡喜遊サ
 レ、此後トモニ我等ノ事ナド、心ニ留メヌシテ、身ヲ終ルマ
 デ、一心ニ太神ニ事ヘ奉ルベシ、是實ニ國民タル者ノ盡ス
 ベキ義務ナリトゾ、御諭告遊ハサレヌ。尊師モ兩親ノ年老
 サセシニ、心殘リノナキニハアテチド、御父母ノ御言ト云
 ヒ、幼少ヨリノ素願ト言ヒ、永ラシ留ルベキニアラテハ、又
 々諸國ヲ御脩行遊サレシモ、兎角御兩親ノ御老体ノ未永
 カラヌヲ案シ給ヒ、翌年正月御歸省遊サレシニ、御父公ハ
 翌月三日御薨シナサレ、尋テ又御母公モ御隠レ遊ハサレ
 シカハ、尊師ノ哀ミ言ハン方ナク、躬ラ祭主トナリ、御教ノ

法ニテ、葬ノ禮ヲ果セラレ、御報恩ノ爲トシテ、百日百夜ノ御修行ヲナサレヌ。ヤガテ、事モ畢リケレバ、九州ヲ限ナク、御巡拜ヲサレ、中國へ渡リテ、諸國御修行遊ハサレシガ、越前國敦賀ノ邊ニテ、路ニ踏ミ迷ヒ、村郷遠ク離レタル、深山ノ中ニテ、行幕給ヒキ。折シモ、遙カ向フノ山際ニ方リテ、黒白モ別ヌ。又、暗ノ中ヨリ、火ノ光リチラ、ト見ヘケレバ、此ハ正シク、袖ガ假居ノ小屋ナラキハ、炭焼ノ賤ノ住居ナルベシ。イザ、行テ一夜ノ宿ヲ請フコソヨケレト、火光目的ニ歩マセ給ヘバ、溪ノ上ナル、巖ノ陰ニ、怪シキ造リノ家ノアリ。尊師ハ門口ニ立チテ、絳ノ由ヲ仰セケレバ、中ヨリ顔容キ、少女出來リ、「御行者様ニテ、御在スルカ願フテモナキ幸ヒナリ、折コソ宜シク侍リヌト、快ク睹ヒテ、洗足取

ル湯モ熱カラズ、又冷カラズ何事モ、最ト親切ニ饗應シケレバ、尊師ハ不審ニ思召シ、少女ニ向ヒテ、「見受クル所汝一人コト、外ニハ人ノ影ダニ見ヘズ、斯ク村郷遠キ山奥へ、獨リ住ムニハ仔細ノアルヲメ、苦シカラズバ、語リテ、ト問ハセ給ヘバ、少女ハ、ハラ、ト落ル涙ヲ袖モテ拭ヒ、仰セナシトモ、幸ナキ身ノ上、申シ上タキ夫故ニ、御宿願ヒシ次第ナリ、妾ハ元ト福非ノ町ノ商人ノ一人女ニアリツレド、去年ノ春、前世ノ罪ノ報ヒテ、義理モ用捨モ荒ク、男ノ山賊ニ、拘奪サレシハ、身ノ終リ、隣リ近所ハ山ト谷、訪來ル者ハ鳥獸ノミ、如此恐シキ山奥ノ、淋シキ家ノ妻働メ、若シモ否トノ色チ、面相ニ、少シナリトモ見ハセバ、後トモ言ハス直クソコテ、氷ノ刃ニ消ヘテ行ク、果敢ナキ露ノ身ノ因果

行者ノ功德助ケテ給ヘト、絶ヘツ續ケツ言ヒ掛ケテ、前後
 生体泣沈ム。始終ノ様子、打チ聞ク尊師モ、思ヒヤラレテ賞
 ヒナキ、何卒シテ其山賊ヲ、本心ニ立復セ、汝ヲ助ケ遣シタ
 ヤト、最ト親切ニ仰給ヒキ。兎角スル中夜モ沈々ト深ク行
 キケレバ、少女ハ驚キタル顔色ニテ、尊師ニ向ヒ、今モ我
 夫始メ、多クノ賊ノ歸リ來リナバ、御尊体ノ爲ニ惡シカリ
 ナン、早々向フノ物置キノ中ニ潜マセ給ヒ、明朝未明ニ御
 出立遊サル様願ハシヤト、申シ上ケレバ、然ラバトテ、尊師
 ハ故ト己レガ物品ヲ履脱ギノ邊ニ遺シ置キテ、靜カニ物
 置小屋ニ入り給ヒ、御太息ヲ唱ヘツ、御立行ヲ爲サレ給
 ヒヌ。如斯トモ知ラズ山賊共、巨魁ヲ先ニ十六人ノ手下ハ
 ソガ後ニ附添ヒテ、今夜ニ限り獲物ナキコソ心外ナリナ

ド、呟キツ、家ニ入りシガ、巨魁ハ何ヤラ心ニウナツキ、少
 女ニ向ヒ、善キ雁ノ下リシヨナト問ヒケレバ、少女ハ誰レ
 モ來リシト覺ヘ侍ラズト、素知ラヌ体ニテ應ヘシカバ、巨
 魁ハ怒ノ聲高ク、汝ヲ蔽フトモ餘モ蔽ハレマシ、此物見ヨ
 ヤト、焦立テ、ツト擲ゲ出セバ、少女ハ之ヲ見ルニ、鼠色ノ木
 綿ノ脚半ト、八ツノ角取リタル杖トノ二品ナリ、少女ハ大
 ニ驚キテ、コハ先刻ノ行者様ノ御召シ物ナリ、今ハ御在シ
 給ハズト、粘ル言ヲ耳ニモ止メズ、四邊忙々、駈回レバ、彼方
 ノ物置小屋ノ節穴ヨリ、幽カニ火光ノ見ヘケレバ、夫レト
 悟リテ、直クニ壁近ク進ミテ、節穴ヨリ、鶴ヤ息フト、羞シ
 ケバ、奇シギヤ、眼ハ如何ナシタリケン、ヒマト戸板ニ貼リ
 着テ、離ダントテモ離レバ、コソ、外聞惡シト、雙手ヲ掛クレ

掌モ亦戸板ニ貼リ着キタリ、口惜ヤト、雨ノ足ヲ掛
 クレハ、趾モ亦貼着タリ。サスガ非道ノ賊魁モ、氣モ魂モ消
 へ入ル計リ、泣クニ泣カレズ、呼ハハ呼ハレズ、慨キ衷ミ居
 マリシガ、此体見ヨリ少女ハ馳セ寄り、「此事アルハ知レシ
 事、妾ガ申セシ言ニ從ヒナハ、ヨモ如斯哀ハアルマシ者ナ
 ト、言ヒケレバ、魁ト呼ハレシ山賊モ、哀シキ聲ヲ張リ上テ、
 「今ヨリ後ハ必ズ心ヲ改メン程ニ、此處離シテ給ハレヤト
 只管ニ詫ケレバ、中ヨリ嚴カナル聲ニテ、「必ズ今後ヲバ恨
 メヨヤト、御聲ノ懸リケレバ、眼モ手足モ直クニ離レタリ。
 賊ハ急ギ尊師ノ前ニ跪キ、「私ハ齊藤太左衛門ト呼ビテ、元
 ハ一個ノ士ニシアレドモ、頓痴ノ持病ノアリテ、戰場へ出
 ズルコト能ハズ、仇ニ此世ヲ過ス中、ハヤ敵方ニ打テ敗ラ

レ、兄モ弟モ親類モ、一度ニ打死ナシタリケレバ、惡シキ業
 トハ知リツ、モ、餘議ナク山賊トナリテ、幸ク此世ヲ送ル
 者ナリ、只今ヨリハ、善心ニ立テ復リ、妻ヲハ父母ノ許へ返
 シ、手下ニハ暇ヲ取ラスベシ、憫レ今日マデノ罪業ヲ免シ、
 御弟子ト爲シ、尊キ教へニ導キ給ヘト、真心面相ニ見ハシ
 テ、一向ニ願ヒケレバ、尊師モ其偽リナラザルヲ知リ、御弟
 子ト爲サセラレ、名ヲ覺行泰資ト授ケ給ヒキ。妻ハ女子ナ
 レバトテ、御弟子ノ願ヲ容レラズ、人ヲ添テ親許へ復シ、
 十六人ノ手下へモ、ソレノ物ヲ分チ與へ、皆正シキ業ヲ
 營メヨヤ、人ノ道ヲト説キ論シ、皆國々ニ復シケリ。夫ヨリ
 ハ、泰資様御供ヨテ、東山北陸ノ諸國ヲ巡リ、日光山中禪寺
 ノ湖ニテ、一七日ノ御水行爲シ給フ、一日二人ノ男女、一人

小兒ヲ携ヘ來リ、尊師ガ前ニ跪キ、偕言ヒ出ス様、我等ハ
 當國字都宮鉄砲町ニ住ム、黒野運平ト申者夫婦ニテハナ
 リ、此レナルハ我等ガ一子ナルニ生レ附キテ、啞ナレバ、
 兩人ハ百方神機ニ祈誓シテ、同町ノ氏神へ、三ヶ年間ノ日
 參ヲ爲セリ、一夜ノ夢ニ、今茲六月中旬ニ至リ、二荒山ノ湖
 ニ、二人ノ行者來ルベケレバ、汝等ガ小兒ノ疾ノ平愈ヲ頼
 ムベシト、世ニ有難キ御詫宜ナリ、何卒御神徳モテ、小兒ノ
 疾ヲ救ハセ給ヘト、涕ヲ流シテ申シ上ケリ、尊師モ再拜シ
 テ、尊キ神ノ御告ゲナリ、此行終リナバ、必ズ祈願ヲ解ルマ
 シト、仰セラレ、御修行終リテ、尊師ハ運平ガ家ニ至リ、祈
 願ノ後、一葉ノ御神符ヲ與ヘ給ヘバ、年頃ノ啞ハ、即時ニ口
 ヲ開キ、朗ヲカナル聲モテ、御禮ノ言申シ上タリ、運平ハ御

神徳ノ顯著ナルニ驚キ、尊師ノ御弟子ヲナンテ、冀ヒケ
 レバ、尊師ハ之レニ名ヲ覺行法旺ト賜ハリシ。後ノ二世日
 旺師トハ、即チ此ノ法旺ノ子ナリ、是ヨリハ御三人連レニ
 テ、脱骨ノ窟、慈悲海、人穴ノ郷、御登山、御中道、御内八湖、外八
 湖、等數知レヌマデ、御修行遊ハサレ、四十一歳ノ御時、製字
 ノ徳ニ因リ、文字ヲ書行ト改メ給フ、國音ノ相通ズルガ故
 ナルベシ、尊師四十二歳ノトキ、御厄除ノ爲メトテ、參明藤
 開山ノ真ノ意ヲ解キ給ヒヌ。又仰ケルニ、五代ヲ經テ、將家
 ニ大難アリ、法家ニ邪魔者出ベシ、此ノ時參ノ一字ヲ開ク
 行者出テ、富士法家ハ八宗ニ分レ、富士信徒愈廣マルベシ
 云々、果セル哉、徳川家ハ、五代將軍綱義公ニ至リテ、柳澤吉
 保ト云ヘル奸臣、意ヲ擅ニシテ、一髮千均ヲ牽クノ危難起



角行尊師徳川家康對話

二
 十六
 又法家ニハ邪道ヲ唱フ者夥多出テメリシガ、食行
 身祿トイヘル行者出テ、角行尊師ノ遺志ヲ繼ギ、神理ヲ
 説キシカバ、次第ニ富士講ハ盛大トナレリ。尊師人穴ニテ
 御修行ノトキ、徳川神君甲州勢ニ追立テラレ、人穴ノ中ニ
 隠レ給ヒテ、尊師御對面アリ、御供頭本多彌八郎正信ヲ始
 メトシテ、三百六十餘人ノ兵士ヲ悉ク壺窟ノ中ニ潜マセ
 タリケレバ、甲州勢モ據ナク、立返レリ。夫ヨリ神君ノ御願
 ミニヨリ、村人ニ命シテ、食事ヲ進メ、參ラセメレバ、三百六
 十餘人ノ御供勢モ、蘇生タル意セシトテ、神君モ深ク此事
 ナ御歡ビ遊サレ、此亂世ニ生レタル武士ノ、釜ニテ炊キテ
 ル飯ニ、菜汁ヲ副ヘテ食スルハ、奢リノ沙汰ナリト仰セラ
 レニキ。尊師ハ容ヲ改メテ、天下ヲ富士山ノ安キニ置クハ、

單ニ太神ノ御威徳ナラバハ能フマシ、故ニ吾レハ神理ノ
高ク尊キ一ヲ説キテ、國民ノ心ヲ和ケンホドニ、尊公ニハ
無道ノ輩ヲ打テ從ヘテ、多クノ民ヲ救セ給ヘ、實ニ是レ我
々ガ上ト下トニ對スルノ務メナリト、仰セケレバ、神君モ
深ク其言ニ感ゼラレ、必ズ然カ爲スベシト、御祈誓ヲ爲
サレタリ、別レニ臨ミテ神君ハ、神理ノ顯著ナル御傳ヲ蒙
リシヲ、報ヒハヤト思召レ、何ナリトモ其意ニ任スベケレ
バ、望マセ給ヘト、仰ラレタレバ、尊師ハ固ク辭退シテ、一身
ヲ捨テ、國家ノ靜謐ヲ祈ル者ナレバ、毫末ノ物ニテモ用
ハナシト、仰セケレドモ、神君強テ止マザレバ、尊師モ然ラ
バ此邊リハ土地穰碩クテ、収入少ナク、村民生活ニ苦ミヌ
レバ、願フハ此郷ノ地租ヲ免除シ給ヘト、申サレケレバ、神

君ハ直グニ本多彌八郎殿ニ命シテ御手鎗並ニ日ノ丸ノ
 屬ヲ村ノ老人ニ與ヘ今ノ赤池氏ニ傳フ又永シ此村ノ年
 貢ヲ免除スベシト仰セ渡サレヌ。此彌八郎正信ハ後ニ
 本多佐渡ノ守ト申シテ下野宇都宮十八万三千石ノ城主
 本多上野介正純殿ノ父ナリ。元和元年尊師切支丹ノ嫌疑
 ナ受ケケタルトキ御老中本多正純殿ノ厚ク尊師ヲ待シテ
 忽チ青天白日ノ身ト爲サレ給ヒシモ實ニ此ニ因ミスル
 者ナリ。慶長十五年(此時尊師七十歳)六月北口ヨリ富士山
 へ登ラセラレ頂上ニ於テ御脩行ノ末法旺様ニ放法ヲ御
 傳ヘナサレ二世日旺ト稱シ給ヘリ。此年十月神君ノ使者
 八穴ニ來リテ關ヶ原合戦勝利ノ御祈願御靈顯アリタル
 ナ以テ御禮ノ仰辭ヲ蒙リヌ。同十二月寒三十日ノ間畧ボ

天下モ泰平トナリシヲ以テ北口富士岳神社大華表前ノ
 大石ノ上ニ立セ給ヒテ肌附カズノ御脩行ヲ遊ハサレヌ。
 元和六庚申ノ年六月朔日北口ヨリ御登山頂上ニテ四十
 八日ノ御断食ノ御脩行ヲ果サセ給フコレハ永祿三庚申
 年太神ノ御傳ヘテ蒙リシヨリ今年恰モ六十一年目ニシ
 テ百餘年ガ其間脩羅ノ巷ト變リニシ我大國ノ兵乱モ悉
 シ治マリ果テ遠ク大陸ヲ離レニシ小鳥ノ蛋ガ家ニマ
 デ我大君ノ御仁風ニ靡カヌ者トテハ更ニナク野ノ末山
 ノ興マゾモ昇平無事ノ唱歌ヲ聞ク愛メキ御世トナリニ
 シ御禮ノ爲メナリトグ真頃江戸ニ突倒シ病ト云ヘル疾
 ヒ此疾ニ罹リタル者ハ忽チ死スレ病ヲ猶ホ路人ヲ突倒流
 行シ死スル者數チ知ラズ尊師ハ御弟子ト與ニ能々江戸

御下り成レ市ノ中處々ニ建札ヲナシテ、病者ニ神符ヲ
 授テ給ヒヌ、未ダ病ニ罹ラザル者ニシテ、此神符ヲ拜スレ
 ハ、其疾ヲ病ムトナク、己ニ其疾ニ罹リシ者モ、一度此ノ御
 符ヲ飲メバ、忽チ愈ユ、然レハ市中ノ老若男女ハ、之ヲ御
 せ、病ヲ禦ギ止ムルト稱シテ、乞ヒ求ムル者頗ル多カリ
 キ。此事幕府ニ聞ヘケレハ、是レ切支丹ノ類ナルベシトノ
 御評議ニテ、乍チ捕吏ノ手細ニ縛メラレ、牢ノ中ニ送ラレ
 又。翌日御老中月番安藤對馬守外御老中五人、町奉行二人、
 御出頭アリ、安藤殿ハ先ツ三人に向ヒ、生國ヲ問レシガハ、
 尊師ハ長崎ナリ、泰寶様ハ越前ナリ、日旺様ハ下野ナリト
 ツ答ヘケル、安藤殿ハ又其方等ガ本尊トスルハ、何ナリヤ、
 ト御糾問アリケレハ、尊師ハ再拜シテ、太祖參神ト、君ト親

トニ事フルノミ、外コハ本尊ノ候ハズト、答ヘタリ、對馬守
 殿、顔面ニ怒ヲ見シテ、汝ガ陳ズル所言、譯ナリ、眞實具サニ
 言上ケズバ、ソノ儘ニハ拾置ク可ラズト、猶モ嚴シク責問
 ヒテ、少シモ容赦ノアラザレハ、尊師主從三人ハ、幾百千ノ
 人々ヲ、助ケタリシガ、我軀ノ禍、無實ノ罪ヲ被リテ、拷問呵
 責ノ鞭ノ下ニ、消ヘテ行クコソ口惜ヤ、ト夫レト言ハチ、
 心中ニ各憂ヒ給ヒケリ。此体見ルヨリ、御出頭本多上野介
 殿ハ、對馬守殿ニ向ヒ、察スル所此三人ノ者共ハ、嚴シク申
 シ候テハ、吟味ニ相成ラズ、仍テ三家ニ一人ツ、分チ預リ、
 徐カニ糾問スルコソ宜ケレ、先ツ某ガ日旺ヲ、土井殿ハ書
 行チ、酒井殿ハ泰寶トヤラチ、預ルト如何ニヤト、言ヒケレ
 一坐ノ面々モ、其言ニ從ヒ、夫ヨリ三家別々ニ、御吟味ナ

サレシモ、素ト天下泰平、衆民安樂ヲ祈ルヨリ、他意ナキ御三方ニマシマセバ、何條不審ノ候ベキ、調ベノ役人方モ、反ツテ神理ノ最モ貴キトヨリ、人穴ニテ神君ノ御鑑詞杯、細カニ覺ルサ得タレバ、三家ヨリ始終ノ顛末ヲ、二代將軍台徳公ニ言上タリ、公ハ大ニ驚キテ、先君ノ恩人ナル行者ニ對シテ、非禮ノ事爲テケリト、仰セラレ、御慰問ノ御辭賜ハリテ、即日赦免ノ命サ被リ、座一点モカ、ヲハコソ、以前ニ倍シテ彌遠シ、三師ガ光リハ八百八街ニ、輝キ渡ルツメデマケレ、此頃賢君ノ聞ヘ高キ、水戸黃門光國卿ハ、此噂聞シ者ガ「某日五ツ半其行者ヲ余ガ邸ヘ呼フベシ」ト、仰セ出サレシレバ、使者ハ事ノ由ヲ尊師ニ達シタリ、尊師ハ畏ミテ、約束ノ日其刻限ニ、水戸邸ヘ出頭シ、日ノ暮ル迄待セ給

ヘドモ、何ノ御言モ掛ラズ、尊師ハ如何ニ進退スベキヤ「ト伺ハレシニ、近臣出來リ、君ハ今日來客アリテ、面談「能ハズ、依テ何分ノ沙汰アルマデハ、隨意ニ飯リ去レヨト、主命ナリト、傳ヘケレバ、尊師ハ意外ノコト、テ面リ其無禮ヲ咎メントセシガ、思ヒ返シテ席ヲ立テ、傍ヘノ壁ノ白キガ上ニ、永戸殿ハ一國ノ城主ナリ、我ハ三國一ノ大導師ナリ、行者ニ向ヒ無禮ノ段「下、筆太ニ記シ給ヒ、直シニ人穴ニ歸リ給ヒヌ。後ニ光國卿、壁上ノ文字ヲ御覽アリテ「是實ニ非凡ノ行者ナリ、早ヤ呼ビ迎ヘヨ」ト、仰セラレシモ、尊師ハ最早不在ニテアリケレバ、卿モ大ニ後悔シ給ヒシト「初メ尊師ハ泰寶様ヲ、二世ノ行者ト爲サントノ御意ナリシモ、山賊ヲ行ヒタル罪ノアレバ、容易ク二世トハ爲シ難ク

ト御煩慮遊ハサレシニ一日白糸ノ瀧ニテ御行ノ際尊師
 ハ泰寶様ニ向ヒ我カ爲シ得ルホドノコトハ汝モ亦之ヲ
 爲シ得ルヤト問セ給ヘハ泰寶様ハ何處マデモ御供致ス
 愚意ニテ候ト御答ヘ申シ上ケタリ尊師然ラハトテ瀧ノ
 上ニ垂レ下リタル藤ノ蔓エ攀チ登リテ木ニ移リ又泰寶
 様モ御後ヨリ續キテ登ラセ給ヒシニ蔓ハ中央ヨリ、アツ
 リト切レテ、アハヤト云フ問ニ雲ナス計リノ飛沫下、瀧坪
 深ク落チ失セ給ヒ影ダニ見ヘオナリニケリ尊師ノ哀シ
 ミ一方ナラザリシガ、漸々ニ諦ラメ給ヒテコレコテ汝ガ
 人ヲ惱メシ山賊ノ罪モ亡ビタルベケレバ、未來ハ善人ニ
 生レ出テ、參明藤ヲ弘メヨヤト仰セラレニキ其後尊師此
 處ニ向ハセラレ、泰寶ハ如何セシヤト仰セ給ヘハ、何レヨ

リカ、數多ノ白キ骨ハ、岩端ク水ニ漂ヒテ、皆一處ニ集リタ
 リ、尊師ハ之ヲ鑑ノ中ニ取収メ、人穴ノ郷ニ葬リ給フ、後寛
 文十一年、伊勢國川上ノ里ニ生レ、後ニ我中興ノ元祖、六世
 食行身祿尊師ト爲ラセ給ヒシハ、實ニ此泰寶様ノ御生レ
 替ナリトツ身祿尊師御一代記ハ後日其後尊師ハ、人穴ニ
 テ晝夜御修行爲サレ、正保三丙戌年、御齡百六歳ニテ、六月
 三日辰刻、人穴ノ靈窟ノ外ニ立出サセ給ヒ、我一生ノ心願
 モ、首尾克叶ヒ、又現世ノ修行モ、既ニ果タレバ、是ヨリ天府
 ニ還リ、太神ノ御坐ニ事ヘ奉ラント、仰言遊ハサレ、天ヲ仰
 ギテ立ナガラ身退ラセ給ヒキ、二世日旺師祭リ主トナリ、
 御教ノ法ニ從ヒ、靈窟ノ傍ニ葬リ給ヒヌ。
 尊師ハ永祿元年始メテ御修行ヲ思召立レシヨリ、正保三

年マテ八十八年カ間、人穴ノ郷ノ靈窟ヲ住居ト定メ給ヒ、
不眠ノ大行凡一万八千八百日、立行三千日、斷食三百日、製
字三百六十字、富士御登山百二十八度、御中道御修行三十
三回、内外八湖數度御巡拜爲サレ給ヒヌ、ナ貴トヤ、

ゆき女の話

左なきだに秋の夕は淋しきをコレが我家の見収めかど
胸に溢るゝ哀しさを堪へ忍びて獨り縋ひ思ひ廻せば回す
程廣ひ世界に我が身ほど、因果な者は餘もあらじ、宿世如
何なる因縁ぞ、神々様も御佛も、醫者も法者もあらぬかし、
トテモ助からぬ命ありせば、ナセ死しては賜はらぬぞや、
如此疾に罹りてより、ハヤ七年を過したり、己が手足を己
が意で、随意にする事ならぬとは、テモ思はしや情なや、日
頃念ずる、謹請富士淺間太神様、助かる者なりせば助けて
玉へ、死す者なりせば死きて玉へ、大息妙王息大拾方光佛
心と祈禱を口に唱へしが、ヨク、越方行末の事なぞ、思
ひ出づれば、居ても起きても、居られればこそ、ワット計りに

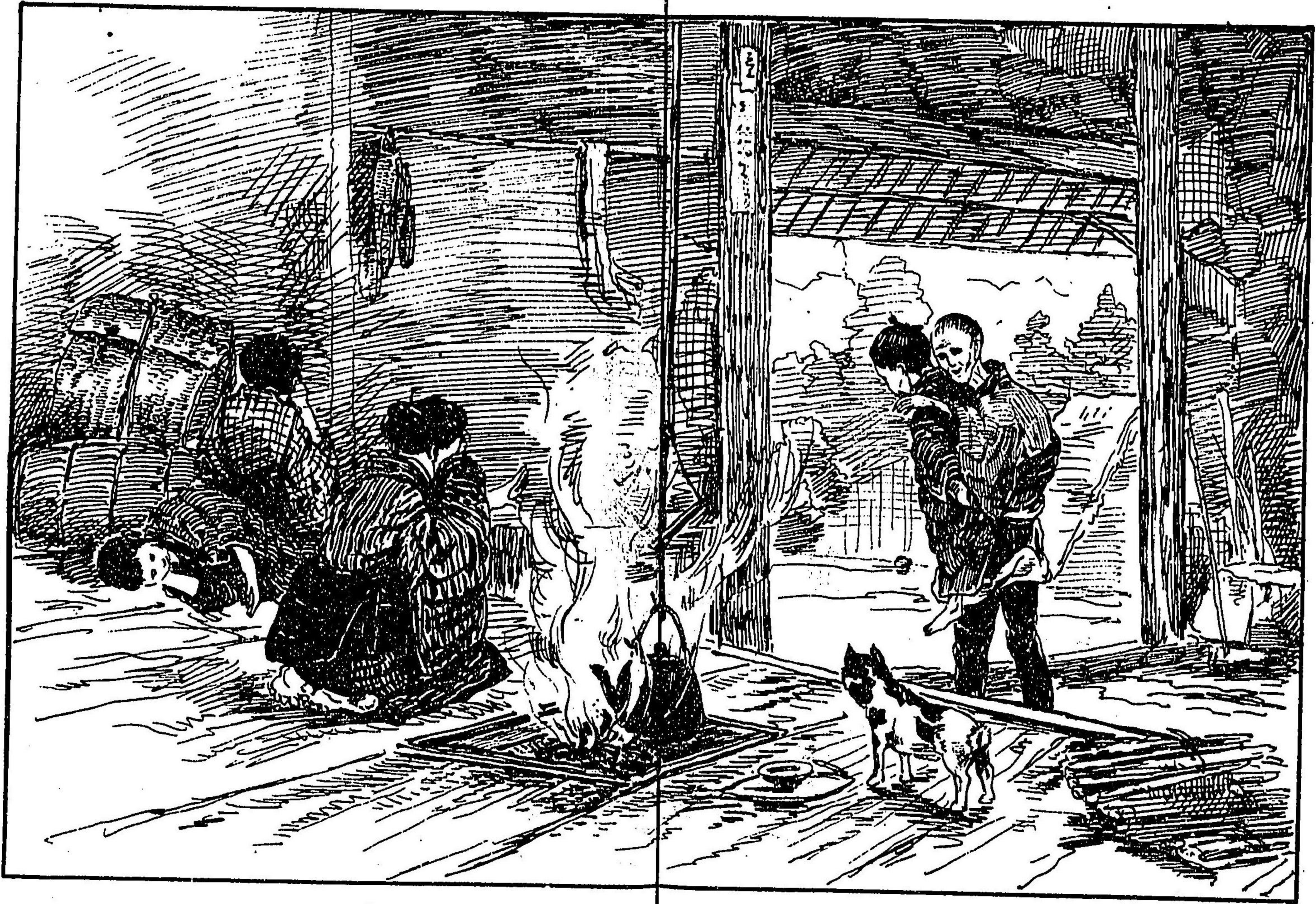
泣き俯したるの、コレツ是レ安房國長狹郡貝渚村宇新濱
 貽屋勘吉が母のゆき女にぞある。頃も秋の末つ方、雲間を
 渡る雁の聲のみ聞ゆ、眞夜中過ぎ、勘吉初め家内の者は子
 供守兒に至る迄、今母上が必死の歎きに沈むどは、少しも
 知らず、白河夜船波路は静か夢心にも、母の疾の癒れよか
 しと思ふ、寝耳よ水にはあらで、ツツ叫びし一聲は、早く
 も勘吉の眠りを驚かしたり。勘吉は急ぎて、母の臥室に駈
 付見れば、今しも消なんとする行燈の彼方にて、母のおゆ
 きは身をもがき、柱を杖に起き上らんと、髪振り乱してあ
 せりけり。勘吉コレはと取継り、物言ひ掛けんと爲せしか
 ば、胸の思ひは百千筋、先き立つ者は涙のみ、泣顔見せじと
 眼をしばたゝき、情言ふやう、勘母上何をか爲したまう、恩

かなれども、奴が如此健かにあるものを、唯一言の御話を
 さへ遊ばさで、如何なさる、御所存にや、と言ひて盡せぬ
 心中を、辞短かよ問ひ懸れば、母のおゆきは、ツツ勘吉の
 顔を刺め、幾度か落る涙を袖もて拭ひ、母をまへも知ての
 通り、私もモウ七年が間の永の煩ひ、飲食兩便の世話を初
 めとして、一から十まで何も彼も、皆おまへ達夫婦の手数
 なり、如何に私が親なればとて、ナドテ氣の毒にあらざる
 べき、夫れも愈るといふ事あれば、鬼も角も、死なねば愈ら
 ぬ此疾ひ、何樂みに生き存らへん、イツツの事、若ひ時から
 信仰する、アノ淺間山に參詣し、断食の大行をなし、御引取
 を願はんと思ひて、今が今發足んどせし處なり、止めて益
 なしコレ勘吉、母を大切と思ふなら、母の願をかなはせよ、

御身が私への孝行は是れに増す者あらぬぞかしと斷つ
 續けつ言聲も次第に細る如くなり。始終の様子打聞くと
 吉對へん言葉なくくも、ワサト聲勇ませて、勘母上よ、由
 なき絆言止め玉へ、古へより長の年月疾ひの床に打臥す
 人も多く侍れど、自ら驚ふて死に就きし者あるを聞かず、
 餘りに歎き玉ふは、神經の迷ひとかや聞きぬ、五年十年病
 みたればとて、愈る時節の來りなば、ナド愈らざる事あら
 ん、淺間山へ御參詣に、御出なされ度をばしめさば、私御供
 いたすべし、但死を祈る杯忌ひしき御辭、必き出させ玉ぬ
 こそよけれ、死も生も天命とやら、御心静かよましませや、
 親であるもの、子であるもの、何氣の毒の候べき、今二三年
 も過ぎたらんには、二人の子供も大きうなり、定めつ婆様

々々と呼て、御側離れぬやうなるべし、孫ども可愛くは侍
 らぬにや、或は諫め、或は慰め、などする様をのづと孝行
 の赤心を顯ひせり、母然れば、お前の言に従ひ、心永に此世
 を送らなん、左はあれと淺間山に參詣する丈は、許して
 よと切に望みければ、勘吉も今は拒むに言葉なく、勘畏り
 以明日の朝は、母上を背負ひ御供いたすべしと對へたり。
 折から聞ゆる鶏の聲、東天紅と告げれば、眠りに就くも
 本意ならずと、勘吉は四方山の話をして、一心に母の心
 を慰め居たり。母淺間山に登るには、人の未だ起き出ぬ先
 こそ好かんめれ、如斯病み疲れたる有様を、縁なき人に見
 られんも好しからと、言ひければ、勘吉も道理の事と思
 ひ、其準備をぞ爲しにける。馳て勘吉は、冷くなく、熱くなく、

程好き新湯汲み持て來り、母の身体を拭き清め、新しき衣
 服を着せ替へなどして、イヤヤ來ませの聲諸共、男盛り
 の勘吉が孝心込し雙の胸、母を背負て今こそは、ヤオラ病室
 を立出たり、此時母は急に勘吉が妻を呼び、母二人の孫等
 抱き起してよ、と母の言辭に不審はあれど、否も孝の道な
 らぬと、勘吉の妻は二人の兒童を連れ來りぬ。稚兒なれば
 是非もなし、婆が意を知りもせて、徒坐睡りの外ぞなき、雪
 女は泪の聲雲らし、母は淺間山に往て來る程に、能う柔
 順して御留守居せや、御土産買て來ませぞや、と口には言
 へど心には、早う其方達も成長なり、此の婆が佛檀へ、香花
 手向けてたもれかし、ソレ計りが此上なき未來の樂みぞ、
 今にも睡り覺めたらんには、婆様は何處へかと、定めつ尋



神田區東松下町十六番地小柴英侍印行

勤吉カ母二兒ヲ顧ル

ね問ふあるべし、不愆の者よと振り返り、家内の様子つく
くと打見遣り、三十餘年住慣し、我家も是が見収め敷、生
きて歸れぬ今日の門出、永の別れと知りもせで、熟睡する
兒のいぢらしや、仮令我が身は、一片の煙りとなりて消ゆ
るとも、此家丈は末長く、榮へ富せんオソーヤ、草葉の
影でも守るぞや、と千萬無量の胸の苦を、若し悟られては
あしかりなると思ひければ、我れと吾が氣を取り直し、母
「イザ參らん」と言ひたりけり、勘然らばとて、様子知らる近
道を、淺間山へと急ぎ行く。幾百千の年経たる、松杉檜生ひ
茂り、晝猶暗き森の中、華表燈籠石階の、數さへ多く頂上に
は、格子造りの古社あり、社の内には奉納せし物山の如く、
幕に提灯鈴に旗など、處狭きまで備へし、体拜し參らすれ

ば、神の御威の程こそ推し量られて尊とけれ、又其外には
 大小の繪馬額壁を隠して、三方より古きは下に新しきは、
 をのづと上に二重三重敷知れぬまで打ち付けたるは、皆
 是れ多くの人々が己が願望の成就せし、御禮の驗なるべ
 し。紅ひ染め成す楓の葉も、餘薫床しき菊の花も、夜來の寒
 さよ置く霜の白き上をば、曉の遠寺の鐘は響くめり。かゝ
 る處へ一人の男、年頃四十六七とも見ゆる、色青ざめてい
 ともく、瘦疲へたる婦人を背負ひ、玉なを汗を拭ひも爲
 し得で、遙の一の華表より、敷石の上を、入來る者のあり、是
 なん飴屋勘吉が、母の望みに従ひて、今しも、淺間山へ來り
 しなり。勘母上さまハヤ御社にて、イヤ憩はせ玉へや
 と、いひつゝ、彼方の芝原の上、に下したり、母の雪女は吾が

子ながらも勘吉が、孝心深きを感じしかば、左も嬉しげな
 る顔色にて、母「サツ苦勞にてありつらん」と言ひしのみよ
 て、切りに御社の方を、バ眺め居たり、勘吉は、手洗水盤の邊
 りに近く行きて、丁寧に嗽ぎなせし、ヤガテ柄杓もて母の
 口をも清めしめ、勘母上様「イヤ御登山の御供申さん」と又
 もや肩をさし出せば、母「否とよ御身の助けは此處まで、
 てよろし、私は是れより一人にて御社近く登るほどに、此
 後の事は必ずとも氣遣ひ玉ふな」と愛想なく断りけれ
 ば、勘吉は怪訝に堪へず、勘母上さまの御言とも覺へ申さ
 せ、平らかなる疊の上すら、歩め玉はぬ者を、二丈三丈彌高
 き、此の御山へ一人にては、なぞて登り得らるべき、物の様
 をも考へてよ」といひしも、實に當然なり、母は一層思ひ定

めたる氣色にて、母「ヤ、勘吉よ、此母が心の底は打明けて、
 最前（家内）の物語りに「已にくれ」とも告げ置きたるよは、あらさ
 るか、死を事丈々は「ッ、ッ」と思ひ止めたと言ひにしも、
 實を言へば此母が寸時も早く此御山へ登らんとての方
 便なり、日頃の氣質に似もやらで、欺きたるぞ是非なけれ、
 今となりては何の様に御前が諫めて呉だどて、歸る心は
 更になし、幾度いふも同じ絆なれど、トテモ平愈らぬ私し
 の疾ひ、イッ、ッ死ぬなら常日頃信心申す此御山の中に、
 太神様の通夜をなし、永の旅路へ行く覺悟、若し此願望が
 叫ふなら、凡婦な私の身に取りて、此上もなき幸ぞ、私しの
 精神と身体とは、御前の去るを相圖として、恐れ多くも太
 神へ、献納さんづ思ふなり、然れば今日唯今より、物も言ふ

まじ、飲食もせまじ、此場となりては是ぞとて、語らん事も
 別になし、只信心を懈らぬ、兒輩を大切に育てよや、風な引
 せと、泣せなせと、今は是までなり、ハヤ歸られよ、といひし
 のみ、心強くも合掌なし、眼を閉ぢてこそ居たりける。勘吉
 は餘りの事とて、言葉も出でず、俯したる頭、擡も得なさず、
 其心中の哀しさは、如何なりしか、推量らんと爲すどても、
 ナド推し量り得るべき、只「と袖しぼる、時こそあれ
 茂れる淺間山の森よりも、翔り出せし群鳥、泣より外の事
 ぞなき。勘吉は何事やらん、頻りに自ら問ひ自ら答ふる体
 なりしが、漸くよして眼を押し拭ひ、懇勤に両の手を土の
 上につかへ、母上様の今のお言葉、委細畏り、左様あらば
 本意ならずも、暇申上いひぬ、ト、いへとゆき女は耳にも

止めず、額つきもせで居たりけり、後に心は殘れども、勘吉はット立上り、我家の方に向ひしが、明日をも知れぬ、風前の燈火に似たる、病人の母をば棄て、兎に角に、何條足の進むべき、一歩行きては吐息つき、三歩行きては願ひ、果しもなくぞ見えたりしが、哀しき思ひに堪へられでや、路上にはマと打倒れ、色青褪めて氣絶せり。かゝる處へ五六人の村人、朝詣てにと通りかゝりしが、勘吉が体を見て、驚くこと一方ならぬ、種々介抱に手を盡しければ、勘吉は漸く我に復り、一禮陳べ終り、借委曲頼末を談して、然れば我も亦断食の不行を爲して、母が黄泉の御供せんず覺悟なりと、物語れば、人々は一向に母子の決心を感歎し、孝行反つて不孝とならぬやうきることよけれ、断食の事思ひ止ま

りぬなと心を碎きて論し慰めければ、勘吉も其理に服し、それよりは始終母親の側にて、看護に心を配り、母子ともに行怠りなかりしなり。思ふ一心巖をも徹すと、古諺實に宜なる哉、太神も兩人の真心を憐みてか、靈驗此に空しからず、或る時ゆき女勘吉の兩人は、社前の板の上に跪き、祈願に餘念なかりしが、頃はや初冬の夜の丑三ッ過ぎ、遙かに聞ゆる犬の聲もいつしか止みて、行通ふ人の影だよ留めず、颯々たる一陣の風は遠く山外より來りて、茂れる杉檜の葉の隙より、清きゆき女が兩鬢の霜を亂し、皎々たる一輪の月は高く天心に懸りて、重なる松柏の梢の間より、澄める勘吉が雙眼の涙を照し、岩打つ灘の氷の音も、自然と細る計りなり、兩人は寒さ骨に徹り、合する手

すら冷へ渡り、屈縮し指の先よりして、珠數の脱るも覺り
 得ざりき、生命惜まぬ母子の者は、ハヤ是までにて死を事
 よと、心ひそかに思ふのみ、頭を低れて居たりしが、睡ると
 もなく、眠らぬともなく、風に揉まる、梢の音の追ひく
 に静まる如く聞へける中に、ふしぎや一條の白雲颯き渡
 り、その中より太神の御姿アリくと現れたれば、コレハ
 と計り打驚きければ、ヤガテ最も清らかある、最も尊き、最
 も美しき細き聲よて、汝が惱める其の疾ひは、此の葉を煎
 ゑて服すれば、愉ゆる事あるべしと、御託宣あるよと見る
 間に、雲も姿も消え失せて、唯聞ゆるは風の音のみ、ふし
 ぎの事よと眼を見開けば、是一場の夢にして、頭邊には一
 片の見慣れぬ木の葉の残りてあり、コハ難有やと押戴き

伏し拜み、夜の明くるを待ちて、彼の夢にて御傳を蒙ふり
 し、木の葉を探し索め、これを神前に備へたる水にて煎じ
 飲ませければ、真に神の託宣の如く、日に増し快き方に赴
 き、日數多く経る中に、竟に健全なる元の身体に復りしと
 ぞ。後ゆき女は御報徳の爲めにとて、日く太神の御前に事
 へ奉り、其の間暇には彼の木の葉を探り集め置き、血を病
 める多くの人を救ひしが、數年の後此神方を同じ國なる
 磯村の先達榮行といへる人に傳へたり、榮行死去の後には
 其子亦普く此藥を施與して、ゆき女榮行の志を繼ぎたり
 とぞ。

細野香次郎の話

頃(ころ)は明治二十一年七月半(なかば)の事(こと)なりき、三伏(さんぷく)の暑(あつ)きをも厭(いと)はずして、諸國(しよこく)より永(とこ)の旅路(たびぢ)も笠(かさ)と杖(つゑ)只(ただ)一筋(ひとすぢ)に富士(ふじ)の教(おし)への崇(たか)さを慕(こ)ひ詣(ま)ずる人(ひと)々の登(のぼ)り下(くだ)りの絶(た)間(ま)なく、二十人(にじゅうにん)と前後(ぜんご)打(うち)續(つ)き、各々(各自)講社(こうしゃ)の目標(めびょう)を着(つ)け、伍々(ごご)各隊(ごくたい)をな(な)し、六根(ろくこん)清淨(せいじやう)の聲(こゑ)を符(こたま)響(ひび)かせて、鈴(かね)の音(ね)清(きよ)く參(ま)へ登(のぼ)る、其(その)物音(ものね)は八百八(はちひゃち)澤(さわ)に鳴(な)響(ひび)き、自(みづ)と神(かみ)の尊(たう)さも、一(いつ)歩(ぽ)登(のぼ)れば一(いつ)歩(ぽ)程(ほど)、一(ひとつ)合(あ)登(のぼ)れば一(ひとつ)合(あ)程(ほど)、心(こゝろ)に深(ふか)く感(かん)ずめり、斯(か)る所(ところ)に二十人(にじゅうにん)計(かゝ)りの一組(ひとぐみ)の參詣人(さんぎにん)、頭(かぶ)に戴(いた)く管笠(くわんかさ)の前(まへ)に、(●)の目標(めびょう)を着(つ)け、汗拭(あせぬぐ)ながら登(のぼ)りける中(なか)に、一(ひと)人(にん)また年(とし)は三十(さんじゅう)の峠(たけ)を踰(こ)り、四五年(よんごねん)も經(た)しかど思(おも)ふ、大(おほ)の男顔(おとこがほ)青靛(あざ)めて左(ひだり)も苦勞(くるわう)げに、懷(なつか)より手(て)を差(さ)込(こ)めて、胸(むね)の當(あた)りを押(お)す、今(いま)しも四

合目上にと登り来りぬ、是なん茨城縣眞壁郡高崎村丸寶
 講社の先達關清太郎が引連れし社中にして、彼の病人は
 細野香次郎となんいへる者なり、先達は香次郎の顔色の、
 平生に變るを見咎めて、香次郎君には氣分でも悪う御在
 するか、大層顔色がといはれて、香次郎は痛む胸をば押へ
 なから三合目を越すと間もなく、何も氣分が悪ふなり、胸
 が痛み出し、只今は最早我慢にも登る事ならぬまでにし
 といへは、一同も打驚き、中にも先達は一しほ心配なし、兎
 やせん角やと氣は探めど、今はハヤ用意の薬も盡き果て
 、人郷離れし途中の事なれば、別に是といふ工夫もなく、
 只困りし者よの辞のみ、思案に呉れて居たりける、稍あり
 て先達は、かゝる時こそ太神に一同揃ひて病氣平愈の祈

願をさす事よけれと申しければ、左こそと應えて、各自が
 奉携し御身貫の箱をば捧げ、前の最清らかなる丘き芝土
 に安置なして、皆が着て居し藁席を重ね布きて、香次郎を
 ば、其が上に臥させ、腰よ着けたる鈴を振り、御身貫に打ち
 向ひ、一心に病氣平愈とば祈りたり、少時ありて香次郎は
 一同に打向ひ、皆様の御傳への神風にて、胸の叢雲吹拂ひ
 大分隙々となりぬ、此分にては少しは登る事も相成
 るべし、遠き國より遙々と、一心懸て参りしに、責ては御中
 宮なる小御岳様迄も参詣なし、夫にて御暇申さばやとい
 ひつゝ、杖を力らに立ち上れば、ヤレ嬉しやと一同も、香次
 郎の足の随意々々附添ひて、徐々歩みたれど、一町程登る
 と又もや胸の痛み出せしが、皆にも斯と告げ知らさば、再

び心配懸るなり、餘りと言へば氣の毒さよど、苦痛を堪へ
 忍びしが、今は堪へ難くやありけん、路傍にハッとして打ち倒
 れ、苦み病む有様に一同は二度驚愕、夫れと言まゝ、寄り集
 れど、薬の思か氷さへも、與ふる事の叶ねば、只口にゴウッ
 ウの經文を唱へつゝ、背杯撫り居る中に、不思議や病人の
 枕邊に、木の問漏れ来る光りに連れてヒカ／＼と地中よ
 り光明のさしければ、先達はハア不思議やと、指以て其所
 を掘りければ、道は开も如何に、錫以て作りし小さな、最
 古びたる一個の薬入にてありたりき、之はと計り驚きな
 から蓋押し開けば、中には慥に薬と覺ゆる物の、半盛ほど
 満てあり、コレヲ大神の授け給ひし御符なるべし、あら有
 難やと押し戴き、皆々經文を唱へつゝ、今を盛りと臥し惱



香二郎頭ヨ光リ物ヲ射ルス

神田區東松下町十六番地小柴英傳印行

一む香次郎が口に啣くませければ、間もなく二三回嘔吐し
たりしが、香次郎は恭しく再拜して「最早忘るゝ迄に氣も
晴々ど胸の痛も何處やら夢の如くに失せ去りぬ」と言ひ
て、一同に謝辞を陳べたり、一同も其の神慮の最も崇きに
感じて、有難涙も袖絞りけり、先達は落る涙を打ち拂ひ、講
社の人々に打向ひ、斯る行き來の人足繁き此の大道の其
中に、所も所とて丁度病人が堪へ難く仆れし其枕邊より、
光明を發し現れしは是れ全く偶然の事にはあらぬ、香次
郎殿の平生の正直と我等が信心の真心とを、大神のしる
しめしなして、斯く御神薬を賜はりし者ならん、左れば此
處に何かな目標を立て、御禮の祈願をなさんと、傍の石に
目を附て、是を然けれど起し据へ熟々見れば、コハ如何石

の正面には何時の世に誰か筆あるか、明々と元祖角行尊
 師と書き記しあれば、是は願てもなき幸ひ哉と、携へ来る
 御饗餅杯備へて、御禮の祈願を濟し、彼の與へ残りの御神
 樂をば、押敷きて、箱の中に取り納め、持ち歸りしとぞ、編
 者親しく其神樂を先達より拜見せり、夫よりは香次郎も
 神の御導きにより、苦もなく御頂上八嶺迄も參詣なし、社
 中一同無事に歸國なしたり、先達は右の場所へ、一大石碑
 を設立して、此の事實を刻みて、高貴き御神徳を永く後
 世に傳へばやと、當時折角盡力中の由に聞さぬ。

小御岳神社炎上の話

富士の麓には、處々に宏壯なる社ありて、何れも淺間太神
 を齋るあるに、イザ御山となる、山中には、三四間四方の
 社ニツ三ツあるのみ、して、大なる社とては、眞に鮮なく、
 殊に峻しき御山の事なれば、境内なといふところは、更に
 なし。獨り北口の五合目に當りて、木山と砂山との界に、境
 内も最廣く、舊殿古開を並べ、其結構の壯麗なんと言ん
 方なく、末社の數さへ最多く、この御山に登るものにして、
 此御社に詣でぬ者はなく、御頂上に雪ある頃などは、わ
 ざ／＼この御社よまでとて、遠國より詣で来る人の許多
 こと、今も昔も變りなしとぞ、言ひ傳ふなる、ソモ此御社を
 何ぞか申し奉る、コレソ是レ、淺間太神の御姉神よましと

す、磐長姫命を齋き奉り、靈驗顯著もて世の人々に知られ
 たる、富士山中宮小御岳神社にぞある。」
 屈指れば、今を距る事十五年前、明治七年の冬十月十六日
 の事なりき、吹來る風は凄しく、空行く雲も何となく、西に
 東に乱れ散る、時しも午前の八時頃、不圖仰きて御山を見
 奉れば、夫と定かに別からねど、小御岳神社の邊りにて、一
 條の黒烟天を衝てぞ立ちたりける、ハテ怪しやの事共よ
 ど、人人瞬もなしあへず、アレヨ〜と見る中に、煙はます
 く、擴がりて、何時止むべうも見へざりき。ソレと覺りし
 村人等の驚きは一方ならぬ、スハコソ小御岳様の御火事
 なり、ハヤハヤ用意を調へよと言ひ觸し、我も人もと慌て
 ふためき、御山さして急ぎける。如何に勇ましく、身拵へし

て、一心込し村人なればとて、名に負ふ富士の高山なれば、
 容易く御社までは登り得ず、渴きし喉へ唾飲み込み、我と
 我身を勵まして、御社近く行き見れば、昨日までも今日ま
 でも、サモ殿かに棟と棟立ち列びたる殿間は、コハ情なや、
 何故か、只一面の火となりて、天をも焦を炎と煙り、風に横
 ふ斗りなり、斯くあるべまとは、前刻より、覺悟極めし村人
 等も、今更一層驚きて、何といふべき言葉も出ず、實ては焼
 残りの一末社なりとも、消し止めん者をと、心は矢竹には
 やれども、只一滴の水だにも、乏しき御山の事なれば、皆諸
 共に腕拱き、徒視詰てぞ居たりける。冬の日足の立ち易く、
 ハヤ里方は薄暗くなりたれども、御山四合目より上は、ま
 だ斜に夕日さす頃となりぬれば、火勢も追々衰へて、煙り

もいつか淡くなり、焼けた後の模様、いづれよりも幽かみ分
 りけり、ニ、ニふしぎは、奥の院の方にあたりて、渦巻く煙
 のその中よ、未だ焼け落ぬもの、はのくど見へたりけ
 る、一事なり、人々大ひに驚きて、唯一足に踏込て、様子委し
 く、見極め奉らんと、手に河握りてあせれども、今朝より、燃
 盛り焼重りたる木材の、山爲を如く夥しければ、疾くには
 行くも、得ならばこそ、折えも木々の梢の彼方より、音凄じ
 く吹来る風、に、積重りし棟梁は、何條以てたまるべき、再び
 ドット燃へ上れば、群集の人、今は、ハヤ是迄なり、先づ兎
 も角も飯村して、明日又登るに若くなしと、是非なく、
 も、三人五人組をなし、ソモ此火事は何より起りし者なら
 んど、一人が言へば、又一人、ソモあの、大風の前に、チヲリと

見へし、未だ燃へ落ぬ者こそ奇怪なれ、各々然は思ひ玉は
 ぬにやと、問懸れば、異口同音にて答ふる様、實は尤なり、道
 理なり、我々迎も其時は、奇怪とこそは思ひしが、生憎の
 ノ西風、今は盡く焼け落て、ヨモ最前の姿はあるまじ、惜き
 事してけり、嗚呼、ア、風だに吹ましならばと、一步降りて
 の、歎息し、三歩行きては、愁傷し、果しもなくを見へにける、
 明け、バ、十月十七日の早朝に、北麓なる、村々の人々は、辨當
 草鞋の用意もよく、我先に御焼跡見奉らんと、御山さして
 急ぎける、編者の一人なる、羽田宿直も、此時親しき友達と、
 二人連れに、夜明ヶ方に家を出で、我等こそ今日の、前驅
 ならめと、小飛に飛で急ぎ登りぬ、三里の原も早や過ぎて、
 登猶暗き長尾通り、小御嶽神社への近道なり、にさしか、

れば、我より先に登り行く人のありと見へて、話の聲の幽
 に聞へけり、余等兩人は顔見合せ、先手の一群追抜けて、思
 ふ念力岩をも透さばやと、佐々木の四郎高綱が、宇治川の
 先陣爲せし氣取りにて、息をもつがや急ぎ歩みぬ、程なく
 彼の一群に追附しが、彼の人等は何事やらん、笑ひつ語り
 つして、一人並びに並び行きぬ、其中年の頃は二十歳前後
 と見ゆる、一人の男首へる様、私しの様な無坊者でも、氣に
 懸る事あるときは、如何しても、定かには眠られず、昨夜杯
 は一晩中、火の燃へ上る所やら、煙の中で音のする所や、い
 るくさまく御山の夢計りと語るを押し止め、側なる
 一人、年の頃五十四五歳の男、俄に顔色改めて、「ア是れ皆の
 衆、夢と言はれては、黙て居やうと思へど、告げづにや置か

れぬ事こそあり、一通り御聞き下され、矢ッ張りアノ昨
 日御焼なされた、小御岳様の事マガと話し出されたれば、
 我等兩人も、それとはなしに、ツイ其方に氣を呉れて、追抜
 く事をも打忘れ、思はず知らず、後トに付、足の運びを徐に
 し、耳を清まして聽居たり、男昨日見々通り、甚く御社が燃
 へ上りて、遂焼落ちて仕舞かと思ふ、見る内に、大きな風が吹て
 来て、炭や灰を吹き飛ばし、タカと思ふと、下言ひ掛けたる儘、
 暫時の間俯きて、物も得言はず、少時ありて、其男前の語を
 継ぎ、暴い風が、今しも焼残りの物を吹き立つよと見る中
 に、灰も煙りも散り失せて、サモありくと明らか、新メ
 に見へしは、這は如何に、本の御社の姿にぞある、ハ、ア有
 難やと、一心にふま拜みくして、居る内、家内の者の呼び

起す聲、あたらず夢をば醒したり。語り終りし其時は、一行の人々の如何なしたりけん只一處にイみて、歩行者とていあらざりき、是餘り話しに味を入れて足踏む事を止めたるなるべき、あつてあるべきにあらざれば、イヤ進まんと、一行の人々は、ヤオラ心を勵まして、御社近く到しも、人聲とてはあらずりければ、未だ一人も登りはせまじと、一足早く境内に若しぬれば、深く御神徳に感じたる人々にやあらん、我より早く四五十人の村人等は、彼方の焼後の中に集り居て、我等が悪し言葉の應をも爲さで、皆一方を能く見詰め、何事やらん、頻りに低聲よて、相語ふ様、如何にも不審なり、中には袖もて、眼を拭ふもあり、合点行かずと思ひしかば、余はツト其集れる人等の後口に到り、足翹て

見奉れば、泣の道理、コハ如何ニ、コハソモ如何よ、道は如何に、山爲す焼木の間に、六尺四方とも思しきほど、煤ぶりもせで、焼残りたる社殿のあり、是なん、小御岳神社の御神体を安じ奉る奥の院にてあり、ななり、人々は、烈しき火炎の中にましく、て、如此恙なく在せしソノ御威嚴、何に譬へん様もなし、アラ勿体なや、有がたやと、心魂に徹去て感念たりけん、些の言葉も出し得ず、流るゝ涙、拭ひも敢へず、唯伏し拜みてぞ居たりける。余は道連れの男の話せし夢は、正夢にてあり、玄事を思ひ當りて、一際深く感じたり。余はヤガテ、衆くの人に對ひて、御身達は、今朝餘程に早く登りしよなど、問ひ懸けたれば、一同は、否々昨夜より此處に在て、一皆も合せ申と言へり、余は又問ひて、然らば御身

達は、昨日夕方大風の吹きし事を、目撃たりしならん。語り玉ひねど、言ひければ、一同は左ればなり、彼の西風もて焼け落たる木材を燃へ盡さまめ、火炎も煙も東へくと吹き送りぬ、其後少時は真暗となりて、物の白黒も別たざりしが、稍ありて奥の院様はありくと見へ渡りしなり、必竟アノ風故、奥の院様は、煤りもせで御坐せしならんと、答へつ、有がた涙に咽び入りぬ、余は只今此事を書記するに方り、當時の有様思ひ出せば、身体をのづから悚然として、心も千々に氣も乱れ、筆取る事も得ならばこそ、讀者幸ひに察し玉ひね。

書して此に至れば、讀者は必や、此火事の起因の知らまほしく思すらん。余は人の悪しさを、語り出でん事の本意な

く侍れど、切なる讀者の望みもたしがたくをもほゆれば、其大畧を筆のついでに。

抑此火事は何より起りしかを綜ぬるに、東京の者にて自ら小御岳一心行者と唱へ、二三年前より御山に登る何の瀬吉と云へる、似而非行者ありけり、此の月の初の頃、福地村(富士北口吉田)に來り、是非御山中宮小御嶽の御社内にて行法なしたき由、申されければ、社司某ハ古より左様の事侍らせ、御山開きの後ならでは、其儀よるしからせ、思ひ止め玉へと、理盡して説きたれども、彼れ仲々に聞入ず、責ては一夜なりとも、戸を開きて玉へと強て請ひ申しぬ、然らば檐下になりと夜を明せよ、内に入る事こそ無用なりと、堅く諭せしかば、瀬吉は畏りぬとて出で行きぬ。後と

にて様子を知れば、彼の瀬吉の某の言に従はず、己れが行法の足らぬをも恐れ、御社の側ある炊所の戸を打ち破りて、其が中に入り、安眠美食を貪りて、世間への三日が問火の物絶ちの大行なりと、言ひ觸らしけるぞ。是れ實に、神祇を詐り諸人を欺かんとせし、心根悪しき者なり。然られば此の災の起れるも、皆單に神の御怒よやあらんと、人々言ひ傳へたり。瀬吉は問もなく罪に服し、其後は東京へ飯りたりしが、元己れの講社たる人々にも見捨られ、思はしからぬ事のみ多ければ、富士に詣る事も能はぬよし聞たりしが、其より後は如何なりたりけん、知る人として、更になし、御神罰左もありなん、

因に曰く、東京一山講社先達朝田五郎吉、山吉講社先達大

塚佐兵衛の兩人は、御普請頭取となりて、兩講社の寄附金を募り、直ぐ其年より御社殿の新築に着手、翌十八年五月には、全く落成せり、今の壯麗なる御社即ち是なり。

又此焼残り玉ひし、奥の院の邊りに、ふしぎや両の小口は燃へたれども、御神名の部分丈ケ、其儘に残り玉ひし一軸ありたり。東海道川崎驛の大野良顯と云へる人は、日頃御山を信心する事、至りて深き者なりければ、神官は彼の一軸を此人に授けたり。大野氏は殊に心魂に銘じて有がたく覺へければ、常に御箱の中に安置して、尊み敬ひぬれば、若し狐付き瘡など稱する病人などは、大野氏が御箱の御供するを見れば、忽ち其病ひ平愈する事うたがひなしとぞ。御利益の程申すもなかく、愚かなり、

松女の話

洲の崎村に、鈴木伊右衛門となんいへる人あり、土地に相
 洲の富有にて、婢僕も許多召使ひ、夫婦の合ひも最と陸ま
 應の富に、婢僕も許多召使ひ、夫婦の合ひも最と陸ま
 し、子供三四人も設けなし、何に不足なく朝な夕なに日
 を送る、伊所の見る目も羨ましかりける程に、満れば欠く
 る世の習ひ、去る明治の十八年、夏の熱さもいつしか去せ、
 虫の音凄しき秋の夕べとなりける。或夜例もの如く、家
 内一同打集ひ、晝の疲に一杯の晩酌を傾け、晩餐も済みて、
 主も婢僕も打ち混じ、浮世話に、眩枕笑ふもあれば、話をも
 あり、晝の疲に眼るもあり、各己が心に任するも、一日
 中の苦勞を忘れむ爲の事なるべし。カ、ル折しも、片隅に

寐入し次女のを松は此ノ年拾二才ト目を覺し、起き上
 り、頻りに手もて目をば擦りければ、母是れを見て、何を寢
 惚けて其様に、眼計り擦るが、餘り擦ると、眼が悪くなりま
 そよと言へば、松何だか母上様、明りがよく見へぬやう
 ですよと言れて一同は起き上り、一同何明りが見へぬと
 は、ソリヤ、一如何なされじや、といふ側より父伊右衛門
 は、ラン、ア引寄せ、を松の眼をば能く視れば、兩眼共に赤味
 さし、何やら薄き雲の櫛なる物のかゝりあれば、父是は定
 めつ、流行眼なるべければ、左まで案ずるには及ぶまじ、水
 にて熱を冷しなば、一日二日に直るなるべし、と父の言葉
 に、家内の者も、左、ソと別は氣にもせで、水にて眼をば冷
 し、拭して、其夜は何なく明けよける。斯くて一日経てば、經

つ程に、追々重る容体なれば、措置て方一の事などあつて
 は、一大事と父はを松を連立、土地に名高き北條病院に行
 きて、診察を請ひしに、醫師の云ふやう、這は仲々流行眼な
 るに、あらず、最早少し遅れたれば、所詮、全快は覺束なしと、
 意外の辭に、肝打ち潰し、腰も抜かせる斗りなり、暫時あつ
 て伊右衛門は、吐長息をつき、伊何程金は要りても、娘の眼
 には替へられねば、何卒充分御治療の程、願はしけれ、と強
 て頼みければ、醫態々御出の事なれば、兎も角も一と先づ
 入院させ、行届く丈けの治療を加へ進らせん、といはれて
 伊右衛門の力を得、伊然らへ今日より入院致さず程に、よ
 るしく治療の程を願はず、と夫々入院の手順を運び、其日
 の内に入院させ、母を呼びて看護となし、附添せ、日々治療

をば受させける程に、一日二日も早や既に、一週間となりぬれど、更に功能なきのみか、却て重れる様子なれば、母親始め父伊右衛門も、一方ならず心配なし、充分看護に手を配り、今一週間も経たならば、少しは愈る事やあらんと、遂一週間が二週間と、最早七週間を過ぎても、治療の功の見へざれば、醫師も今は是までなりと思ひけん、或日を松の母を呼びて、醫折角伊右衛門殿の望み故、今日迄療治はなしたれど、トテモ平愈るべきやうも見へざれば、連れ飯り他の能き醫者などに見するこそよけれ、と情なき辭に否みもならず、直ぐ夫にも其由を告げ知せ、一先病院をば退きたり。夫よりは世間の人の可と云ふ事は、醫者よまれ、法者にまれ、手を盡し氣を配り、金銀を費す事の多かりき。鬼

や角なして日を過す内、娘の眼病は次第に重り、今は早や眼球一面白雲を以て蔽はれ、繚致善けれど、玉に疵、生れも附かぬ不具もの、眞の盲目とはなりたりき、を松の哀み云ん方なく、今より此の永の年月を、盲目となりて、はかなく經ち、友だちなどが面白く、遊び戯を聞くいまはしき、ト一此の眼が明かぬなら、寧ろ殺して給はれ、と見へもせぬ眼を見開て、親に絶りて泣き入るも、理せめて憐れなり、聞度毎に兩親ハ、胸に針打つ思ひなり、父は涙に聲雲らせ、父今更悔うとも詮なけれど、彼の時より北條病院に、今日迄入院させて置たなら、平愈らぬとても斯く迄に、少しも見へせなりはせし、抜かした事をしてけり、と後悔するも理なり、せめては今一度諦の爲、是非北條病院に連れ行き強

て治療を乞ひ受て、少しありとも見ゆる様なしたき者や、な
 と父の辞よれ松も喜び、相談茲に纏りて、其日の内に又候
 を松をば、駕籠に乗せ、父が附添ひ、彼の病院に連れ行きて、
 診察を請ひたれど、醫師は仲々、諾す、醫先に御出の其時に
 さへも、最早時は遅れたり、トテモ、全快は覺束なしと申せ
 し程の事なれば、今となりては、尙更に手術を施す便はな
 し、是後は薬呑む事は思ひ止みて、夫よりは、今より歸りて
 世の人の云ひなす如く、眼の病には、日蓮上人を信仰せられ
 ば、利益のあるといふ事なれば、心を替へて、御祖師様を、信
 仰することよからんと、心安めの世事言葉、娘は堪へ兼、ソ
 アット計りに泣き出せば、父も早や是迄なり、強て願ふも
 詮なしと、本意なく、くも歎き居る、我が子を駕籠に打ち

乗せ、跡に附添我家を指て、行來も繁き道をがら、越し方や
 未來の事なと、繰り替して、溜息ホットツシ、くも、想ひ回
 せば、何事ぞ、父母の遺産も、其儘よ、四十年餘りの永の年月
 別に不幸も蒙らぬ、一つの物にも不足せて、近所の人にも
 兎や角と、羨まれたる身の上も、今は我子の病にて、泣の涙
 に袖濡し、何時乾くべき目當もなく、不愍やを松は、永の未
 來の年月を、闇に過ぎこし、嘸や嘸、起伏し、不自由なす度、に、
 此親までも恨まれん、如何に心を盡しても、責て、白黒な
 りとも見分る程になしたきものや、兎やせん角やと、親子
 の情の切なる思ひよ、歩む足さへ我知らず、立ち止まりて
 居たりしが、嗚呼、どう考へても、今となりては、仕方なし、今
 日も今日とて、便と思ふ病院にては、断られ、其上御祖師様

を信仰せよとの事なれど、我れも永らく富士の大神を信
 仰なし、不肖ながらも、山包の先達をも拜命して居る身な
 れば、昨日までとは事更り今日より一層氣を凝し、精神込
 て祈りなば、日蓮様にあらずとも、なか御利益のあらざ
 るべき、イザ今より飯りなば、浅間様に願を懸け、只一心に
 信心せん、左なり、と我れに問ひ、我れに答へて、思按を定め、
 前路を見れば早や既に、我子の籠は影だに留めず、伊右衛
 門コレハと足を早め、漸く我が家の門前にて、追附たり、斯
 くして仕度も取り終り、下女の持ち出る茶など呑みつゝ、家
 内の者一同是に來られよと、主人の言葉に一同も何事な
 らんと、座打ち拂ひ其の前に集り來れば、主今改めて皆に
 話を、餘の事ならぬ、彼のを松も皆等の知ての通りの盲

日とありたれば、今日も折角病院に連れ行しが、到底治療
 成し難しとの断り、此の上の最早是非なし、我常に信仰な
 す、富士淺間太神に、祈齋を掛け、一七日が其間、斷食なさん
 と考ふるも、若しも家内の内に一人なりとも、神信心など
 は無汰の事なと、心得違ひの者ありては、折角の信心も水
 の泡、高き願も叶ふまじ、夫故皆々の心得を聞其上、我が心
 を定めばやと思ふなり、と意外の問ひに、一同は顔打見合
 ひ、暫日言葉もあかりけり、稍ありて一同聲を揃へ、一同至
 極御尤の御考へ、不及ながら我等も與に信心致す程に、充
 分御信心の程願はしけれ、と云へば伊右衛門は歡びて伊
 然らば今より直様仕度をなし、一週間が其間、村の鎮守の
 御社に、忌み籠りして信心なさん、と妻に言ひ附け、松に

も笹垢離なして、清らなる衣服を着替させ、自分も裸体となりて庭に出で、用水を氷手桶にて六七杯頭より水を被り、身も付き染みし不浄をば、水垢離にて洗ひ流し、清浄なる身体は、白き行衣を纏ひ頭に寶冠と富士講社は登山の着寶冠と稱してを被り、頸に水晶の珠數を掛け、御身貫箱をば奉携し、僕に松を背負せ、裏手傳ひに鎮守の宮に出で行きける。右手の方の小高き所に、松杉檜幾万本と、數知れぬ迄に生茂り、晝尙開き森の内、遙かよ見ゆる朱塗の華表は、是なん富士淺間大神を奉齋る、鎮守の御社にぞありける。伊右衛門の早や此の御社の前に來りければ、前を流る、一條の御手洗川に口を嗽ぎ、松にも口嗽がして、心に經文唱へつゝ、三四段の石階を登り、朱塗りの鳥居過ぎ

たれば、正面には最と古びし御社なれど、脩葺手入も行き、屈き、隅より隅まで帯目の筋立ちてあるを見れば、自づから村人の尊敬をなす御社とは知れたりの父は松を拜殿に下させ、父私が祈願の濟む其間、彼方に行きて休み居よ、と僕を遠けお松を引き連れ、神前に進み、遙かの下坐に親と子は、両手を下に額て、暫し頭も掻げ得せ、一心込て胸の内、心の丈を練り返し、くても懃ひける、稍ありて頭を上げ、聲高らかに祈禱の文言を讀み上げ、終り、再拜して引退き、ヤガテ僕を呼、盲目のお松を背負せ、我家に飯さんとなしければ、稚ながらも父に向ひ言ひけるやう、私しが爲に父様は、今日此所に一七日が其間、つらき斷食なし給はる、思召なぞか子として私が、父上御一人此處に置き、をぬを

め先には販られぬ是非共我をも御傍に置き諸共信心
 させて給へれやとワアツト斗りに泣き伏せは父も其優
 しき心根を察し暫し涙に呉れ居たり稍ありて父も松よ
 うも云たり年端も行かぬ其方なれど人の道能く知り分
 ての今の言の葉其伶俐き天性にて大人なり人並に目
 見ゆるならば嘸や嘸汝たは愚か此親迄世間の人に譽ら
 れん早く富士大神の御神徳にて元の通りの眼となりし
 其顔を一目なりとも見ま欲しやとれ松を抱き上げ抱締
 互に涙に咽ひける僕も共に貰ひ泣き聲擧して僕サ御
 嬢様も販りあそばせと告げて父は氣を取り直し父是か
 松汝の云ふ事は最もなれど素と眼病は癖の弱りより起
 るぞか聞ぬれば今父が傍に置き共に信心なすときは尙

更瘳は日に増しに弱るは必然知れし事イカニ神機に祈
 願なせばとて自分の身から病氣を作る様な事しては却
 て神慮を煩き道理此事は思ひ止めて先に販り朝夕忘れ
 ず信心なし養生怠らず爲せよかし一週間の決願日には
 歩みて御禮爲す様にせよ父は是より祈願を始むる程に
 早々販れと抱き上げて僕の背にぞ負せたりお松は本意
 なくくも我家にこそは販りたり後には獨り伊右衛門
 は我が子の販るを見送て徒茫然として居たりける折か
 ら聞ゆる村寺の夕暮告ぐる鐘の聲常には左程と思はぬ
 ど今日は一しほ身に染み渡り埒求むる鳥の音もいどい
 憐を増鏡曇りなき身の一筋に又も神前に打ち向ひ拍手
 拍て祈願なせば響く符を木の間に殘して日は寂然と暮



目盲、松女初テ華表ヲ見ルニ

まける。斯くて伊右衛門は、明け暮れ神前に額きて、大行怠
 りなかりしが、明くれば早や一週間の決願日といなり
 ける。朝より例の如く、一心に祈願なす、折から、今日決願日
 とてお松を僕に背負せて、母が附添ひ、多くの御供物、杯用
 意なし、今しも此の御社に詣で来て、一心不乱に祈禱爲し
 居る主人の後より、僕はヤオラ聲懸けて、僕「旦那様、只今
 御嬢様を御連れ申してゆふと、云れて後に振り向ひ、伊
 、能う早々と御参に」と言ふ顔さへも青褪果て、見違ふ斗り
 に肉落て、聲も十分立ち得ざりき、是れ一週間か其間、斷食
 なしたる故なるべし、斯くて今しも持ち來りし、獻供物を
 ば八足に高く積み供へ、親子三人諸共に合掌なして、稍暫
 し御禮の祈願なしたりき、扱ても祈禱も濟みたれば、お松

を僕に背負せ、後に兩親附添ひて、又候口に經文を誦しつ
つ、已に華表をば潜らんとしたる時、不思議や盲目のれ
松は僕の背よりありて、アレ鳥居がと聲高く呼はりたり、此
聲聞て兩親は、親何に鳥居が見ゆると、言事がと問ひ返さ
れて、「い見へます様で」と只一聲答へたり、兩親は是はと
斗り、れ松を背より抱き下し、よく見れば斯は有難や
今が今迄も一面に白き雲にて蔽はれし、晴暉のそが真中
に、少し計り、雲の切れ目の見へければ、父ヤレ嬉しや、忝な
し、我が一心の徹てか、神の恵の有難や、勿体なや、と兩親は、
天をば仰ぎ、地を拜す、其心底は如何ならん、書もなかく
恐かなり、お松の尙更嬉さの愈増し、小踊なして物珍しさ
うに、四方キヨロく見廻る内、又もアレ彼方に石塔龍が

といへば兩親涙を拂ひ、兩親サテも彼の塔籠が見ゆるの
 か然らば是はと手を出せば「夫れも見へます、親、夫なら是
 は何本か」といへば「夫れは三本」と手の指までも敷へ得ら
 る、迄になりたれば、父「然らば是より立ち戻り、尙も明日
 より三七日が其間、日参なして御禮申さばや」と我が子の
 手をば母親がひき入る計り打よるこび、又も神前よ額さ
 て、涙にこそは呉れにけり、稍ありて伊右衛門は慇懃に經
 文を誦し、三七日が其間、日参なして御禮申さんと、固く誓
 ひ、吾が子をば歩ませて、徐々と我が家をさして販りける
 程に、家内の者も上を下へと打ち喜び、其神徳の嚴顯ある
 に、感せぬ者こそなかりけり。斯くて毎日父は娘と諸共に、
 三七日が永の間、日参怠らぬ早や決願日となる頃は全く

平常の眼に復り、少しも差ふ事なかりしと、夫れよりは、今
 に至るまで、一層富士の大神を信仰なしけるとぞ。神の御
 威徳の程こそ、恐ろかりけることいもなり、

ふじ女の話

相撲國足柄郡狩野村に、土屋太郎左衛門と云へる人あり。
 幼少ときより、我が富士の太神を崇敬爲し家業の隙には、
 我が爲め、又世の人の爲めとて、一心に祈願をなせしかば、
 屢々太神の御威嚴に依りて、人を救ふ事の多かりければ、遂
 に富士丸東講社の先達となりたりしが、其講社も次第
 とに盛大に成り行けり。茲に不思議は去ル安政元年十一
 月の大地震のときなりき、或日用事にて太郎左衛門の、小
 田原に行かんと思ひ、早朝より仕度なし、門を出で、二三
 町計り行きたりしが、如何なる事か、何となく心懸りのし
 て、足の進まぬに、ト心付き、之に定めつ、太神の御知せに
 て、家内に何か災害のあるといふ事ならん、何にせよト

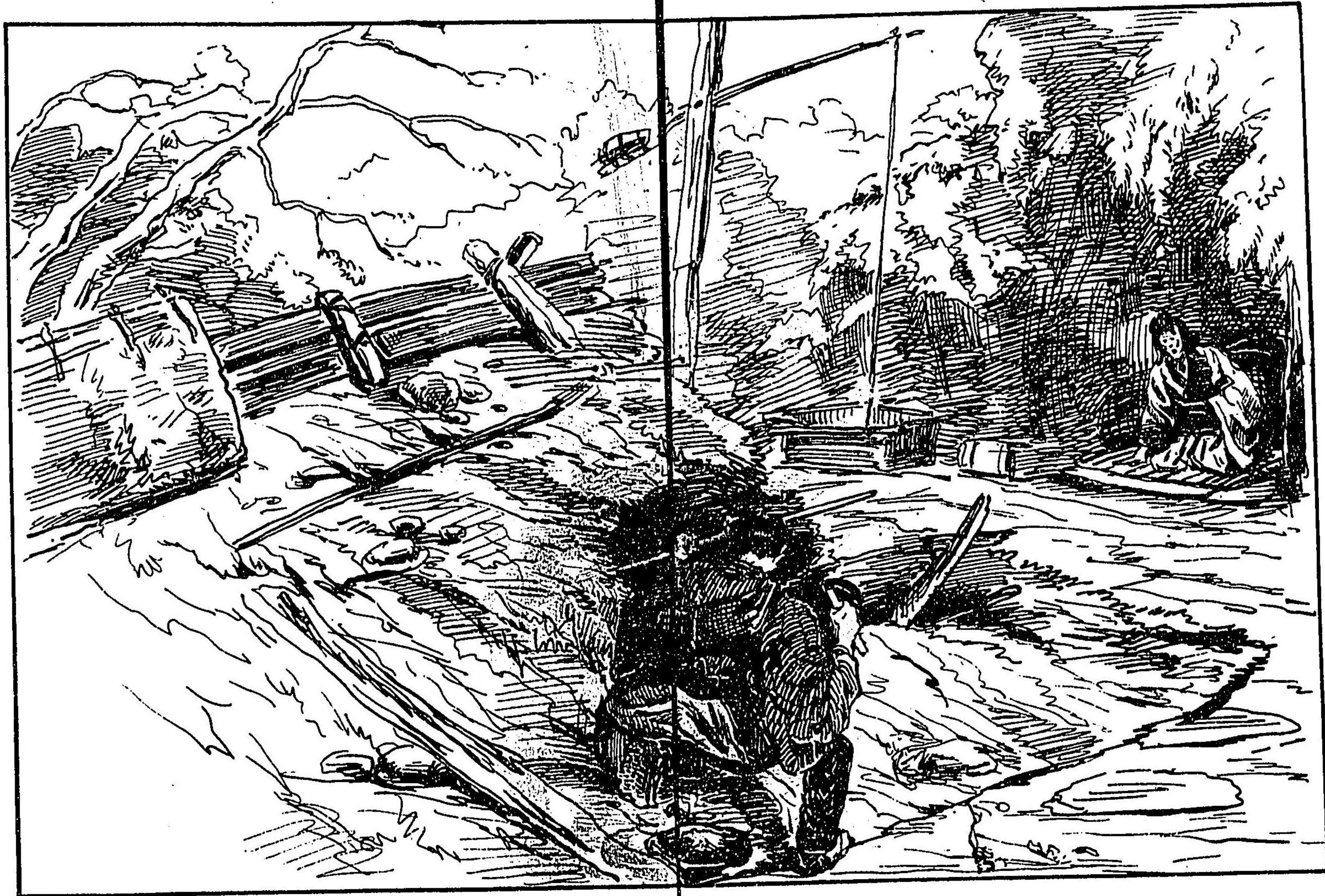
先づ立ち戻り、家内と見巡り、其の上にて發足するが宜しか
らん左なり、と我れに問ひ我れに答えて立歸り勝手
許より物置まで、残る限なく氣を配りしが、別に之と思ふ
程の事もあらずりければ、妻にも其由告げ知らせ、留主申
萬事に氣を附けよと申し置き、又も立ち出でんとせしに、
不圖傍らよ、スヤ、と眠り居る幼女に心附き、斯機の時
は、如何なる狂神の坐さんも、測り知られぬ、悪魔除けにも
どて、大神の御棚より、身稜箱(富士講社は古より太祖參神
を始め、淺間太神、小御岳太神及び、元祖角行尊師、身稜尊師
の掛帳を、御身稜と稱ひて、之を箱に納め、年々登山の節は、
之を奉携するを例とす)を取り下し、彼の熟眠り居たる幼
女の枕邊に置き、又も神前に向ひ、無事を祈りて、出で行き

けり、斯くて用事も濟み、飯り來かゝる道すがら、頻りに山
河の鳴動するを、不審に思ひ、如何なる變事の起るならん
と、安からぬ思ひをなしつつ、足早に歸る程に、我が里近く
なる頃は、倍々暴動して、歩む足さへ踏も止らぬ、路傍にヒ
メと打倒れ、四方を見れり、山は崩れて河は塞り、大木も根
ながらに抜けて、田畑も見る、海となり、天地も爲めに
滅却せん、有様に始めて地震なる事を悟とりたれば、早
々家に飯らんと、氣は喘れども、立事は思ふか腹這せるさ
へ自由ならず、石に傳り、草に攀ぢ、七轉八倒の苦みにて、辛
じて我が村に入り、四方を見廻せば、あら情なや斯は如何
に、人家の片端より、右方左方に打ち仆れ、棟下に壓死して
進む血潮、在所知らすもあれば、擔先に体半分壓へ

られ、扶を求むる聲に名残を留むるもあり、親は子と呼び
 子へ親を尋ねて、泣き叫ぶの聲、見る物聞く物として、惨れ
 衰しからずといふ事なき、息巻切て太郎左衛門は、漸々に
 我が家の前に立歸り見れば、早や我家は前に倒れし儘、家
 内の者の一人も見へざるに、胸先づ盤き、妻は永らく血の
 病にて臥し居りて、外には只幼女のみあれは、可愛や妻子
 は此内よ、壓倒されて、非業の最期を遂げたるなるへまど、
 心も千々に氣も乱れ、衰に廻りて彼方を見れば、僅か計り
 の竹藪の中に、妻の姿の見へければ、やれ嬉しやど、急ぎ行
 き、互の無事を喜べは、泣居る妻は、ワット計りに聲張りあ
 げ、涙ながらに語る様、妻は仕合にも、已に危き其所を近所
 の人に扶けられ、此處にて漸々よ、一命丈は扶かりしか、良

人の御出の其折に、眠りて居たる彼の嬢は、不愆や其儘に
 彼の下に、倒れし我家を指して、猶も悲難に暮れにけり、
 始終を聞て太郎左衛門も、夫れなら我れらが出て行くど
 き、眠りて居しが、其儘に相果てしか、又手もく不愆の事
 をばしてけり、と、千萬無量の胸の苦を、ホロリと落せ、一滴
 の涙の中に含まして、兎やせん角やと、さる間に、地震も追
 々鎮まれば、此れ幸ひと、太郎左衛門せめては死骸なりと
 も、一時も早く取り出し、苦勞を慰させん、オーソーヤと、
 勝手覺へし潰れ家ある、我が子の寐し當りをは、屋根梁と
 段々に、取除けて様子は如何にと、差し暇けば、這は痛しや
 生れ子は、遙の下よ眠りし儘、壓迫られて見へにけり、斯く
 あるべしとは思ひしも、今眼前此様子を目撃は、ナカ

に親子の情のいや増して、狂氣の如く聲張り上げ、娘よや
 娘よや、嗚苦勞にてありつらん、父であるぞよ、父じやぞよ、
 ハヤ／＼元もとに復たがれやと、破やぶりし屋根やねに首くびさし入れて、狂くるひ
 叫こゑぶも道理ことわりなり、斯かてありても詮せんあければ、寸すん時じも早はやく、木石こくせき
 を取と除のけ爲なして抱かかき上げ、様子ようすを見みんと、我われれと我われが心こころを確たか
 とはげまして、重かさなる木々こぎをば一生懸命いっせいきんめい、必死かならずしとなりて膝ひざ
 へ寄よせ、手て早はやく我われか兒こを抱かかき上げ、身み体たッット打見遣うちみやりれ
 は、頭部あたまの片かた面めんは、二三ふた分ぶ通とり、材木まきの爲ために壓おさられ、殆ほとんど平たい
 面めんとあり居ゐたり、此これはど計はかり腹はらに手てを當あて、探さがり見みれば、
 未まだ胸むねの當あたりに、稍や暖ぬか味あじのありければ、又また手ては未まだ玉たまの緒お
 の絶たへざりしかと、慌あわてながらも、顔かほに氷こおりをば吹ふき懸かけて、
 聲こゑを限かぎりに、娘むすめよ嬢ぢやうよと二度三度ふたたびさんど、呼よぶを相圖あひづよウンと一ひと



圖ルム 瞰ヲ 兎我 元侍 發ヲ 家ト 潰

聲泣き出せば、父は意外の喜びに、氣も襦はれて暫時の間、
只茫然たる計りなり、かゝる所は近所の人々、今しも呼び
し其聲に、何事やらんと、皆々此處に寄集り、巨細を問へば
漸くに、太郎左衛門は我に飯り、今朝しも用事にて、小田原
に行き、歸り途の難澁より、死せしと思ひし此の幼女の蘇
生たる一二三四を、物語れば、皆々も其の無事を祝ひ、且つ
言へるやう、此の幼女が、斯る大木の下に敷かれ、頭部まで
斯くまで壓へられながら、扶りたるぞふしぎなれ之れと
申すも、御身が常平生に、御信心をば遊ばす故、太神の御恵
みに頼りて、扶かりし者なるべしと、異口同音に言ければ、
太郎左衛門は始めて今朝しも心懸りの事より、立戻りし
事に心附き、誠に皆様の御言葉に依りて、考へ附しが、實は

今朝出立せし時、何分何か氣懸りて、足の進ぬ故、之れは定
 めつ神様の御知らせにて、何か家内に災害のあるといふ
 事ならんかと、立戻りたるが、之れとて別の事もなき儘に、
 念の爲め傍邊に眠りし此の子の枕許に、御身貫箱を安て、
 出で行きしが、夫れ故斯くは、命の扶かりし者ならん」と、語れ
 ば、皆々打驚き、左こそあらめと、幼女の寝たる所に行き見
 れは、あら有難や、御身貫箱の依然として、少しも毀れず、幼
 女の枕許に坐まして、幼女を壓せし材木は、此の御身貫箱
 に支へられ、爲めに僅かの隙を得て、斯くは命の扶かりし
 なりと、一同は深く其神徳に感じ、有難涙に咽びける。か
 る程も、太郎左衛門は、一層神慮の嚴顯なるに服し、此の幼
 女は、全く日頃信ずる、富士の大神に賜はりし者なれば、其

の名をば「お藤」と改め、七歳に至れば、必ず太神の御庭草を
 踏しめて御禮仕べし」と、水垢離なし再拜してぞ誓ひける。
 去る程におふをば、太神より賜はりしと思ふ者から、以
 前に倍して、愛で育てけるに、年も早や七歳の春となりぬ
 れば、太郎左衛門は身は富士の先達にしわれと、名にし負
 ふ日本第一の高山なれば、血氣の大人にても、容易く登る
 事の成ざる程なるに、如何にして此の幼女をば、太神の御
 庭の草を踏せばやと、千々に工夫をなしたれと、別に手輕
 の、善き思接もなき者から、己れが講社の者の年々に、富士
 に登山する人の數多ければ、多勢の手を借り、登せらる丈
 へ登せ、夫れにて御禮申さばやと、講中の人々にも、其由を
 懇に頼みて、萬延元年甲申の年、土用の半バも過ぎたる頃、太

郎左衛門は多勢の者の先達となり、彼のをふじをば、或は
 脊負ひ、或は歩ませ、杯なしつゝ、須走口より徐々と、富士の
 御山に登らせける。おふじも始めの程は、草臥て、苦勞に堪
 へぬ様子なりしが、追々登るに従ひて、次第々々氣力も愈
 倍し、今の大人に劣らず、平常人先に登る者から、父は打笑
 みつゝ、一賞に國許を出づる時は、斯様を幼女を連れ立て、如
 何なる難儀をなすやらんと、獨り心を病ましたるに、御山
 に懸り斯くまで、容易く登得んとは思ひもよらき、諺に
 思ふより産むが易ひとは、此事なり、此も單に太神の導き
 給ふ故なるべし」と、語るを聞て一同も、左なりくど賞賛
 しつゝ、苦もなく早や三合目に到着きたれば、小屋に立ち
 寄り、強力（荷物食物等も脊負ひ登る者なり客の）が持ち來り

し、晝發を使ひ、暫時く休息なし、已に出立なさんとなしけ
 れは、這は如何に、今が今迄も、面白さうに目の先に、遊ひて
 居たるをふじの姿の見へざれば、小屋の亭主も連れ立ち
 て、其周圍をば探したれども、更に様子の分らねば、太郎左
 衛門始め、皆々も興を覺まして居たりし處に、今しも四合
 目上まで、一人の娘子に逢ひたりといふ、一人の下山客の
 ありければ、一同は漸く力を得て、然らぬ是より急ぎ登り
 て、追附かんと、息該切て登りつゝ、逢ふ人毎に問ひければ、
 今五合目に逢ひたりと言ひ、五合目に到れば、今七合目
 に逢たりしといひ、七合目に着けば、今は九合目に逢
 ひしなど、驚く計りの早足なれば、如何に此方が急げばと
 て、追附事の得ならばこそ、八合九合と尋ねく、遂に頂

上に到り、小屋に立ち寄り、様子を問へ、亭主「最前一寸小
 さな娘子が見ゆる様なりしが、其節は多人敷込合ひ居た
 りしかは、能は其行術は知り侍らねと、大方御八嶺の方へ、
 御行きなされしなるべし」との辭に、一同は「然らば、多くの
 道者の跡に付き、御八嶺に行きたるにや、我等は今より御
 八嶺を探まながら参る程にも、しも其間に我が少女が來
 りたらんには、必ず留置てよ」と頼み置きて、一同は御八嶺
 さして尋行く、彼の峰だに踰え行かば、彼の女は其處に居
 るなる歟、此の澤だに越し爲さば、定めつ彼の女の影は見
 ゆなるべし、先に行く一群の客の中にこそ、雜りて歩みや
 しぬらんなど、一方ならず心配なま、尋ね探して今はハヤ、
 元と來し小屋に立ち歸り、様子如何にと亭主よ問へば、亭主

最前より、御歸の客毎に、氣を附て聞たりしが、一向様子が
 知れ申さず、事に依ると、最前私が御見受け申せしは、最早
 御下りのとさにてもありつらん、左すれば丁度皆様と、砂
 走にて行き違ひしなるべし」と亭主の判断に一同も「夫に
 ては、餘りに早けれども、斯様なる時は、人の力ではなし、皆
 神の御業なれば、如何なる不思議のあるやも計られず、實
 に亭主の言葉の如く、已に歸りし者ならん、左すれば必ず
 須走まで下る中には、見當るなるべし」と講中一同ハ父太
 郎左衛門に力を附け、小屋を辭してぞ下りける。登りと違
 ひ下りには、頂上より、只一條の砂道此砂走也なり、是れは、瞬く
 間に、ハヤ一合目となりたれば、小屋に寄りて一休せんと、
 何氣なく立ち入れば、這は开も如何、斯は如何に、今が今迄

も、尋ね詫にし、幼女のおふじは、不審や入口なる、椽蓋の上
 に、仕度の儘横たへに打ち臥し居たれば、之れはと計り一
 同は、餘りの事に、氣も仰天呆れ歸りて茫然と、物も得言は
 で居たりけり。太郎左衛門は、最早尋ねべき便もなしと、心
 の中にて、獨り愛ひに沈み居りたる所、圖らず姿の見へた
 れば、コハ、おふじかと腰打ち抜かし、我が子よ、おふじよと
 急ぎ立ち寄り、顔に手を當て様子を見れば、平生の如く、徒
 スヤ／＼と居眠り居たるに、始めて安堵の思ひをなし、小
 屋の亭主に向ひ、様子を聞けは、亭主然れば、今より一時間
 計り以前唯御一人にて小屋の前に、大層御草臥の御様子
 にて、顔色も青褪め、悄然と立て居て、故御連れの衆は如何
 なされしや、又御一人にて御坐するにやと、色々に尋ね問

ひたりしも、サツパリ御應のなきものから、何にせよ年若
 の娘子が、一人で御出での筈はなし、今にも御連の衆の、お
 尋あるべしと思ひ、小屋の中にて、ゆる／＼と御休み遊ば
 せと申しても、更に御挨拶なきのみか、動きもなされ申、此
 れは定めつ、如斯の御持病にやと、内に抱き入れ、此椽蓋に
 と上げ申せしに、さもお草臥の様子にて、スヤ／＼と睡ら
 せたまうものから、お薬一ツ進め申さばやと、思ひたりし
 も、折角眠りて在るを故、却て起し、杯をば、宜しかるまじ、
 其内には、何人か、必お御尋ねに相なるべしと、薄き蒲團に、
 厚きお世話も届き申さずと、最も切なる主の辭に、太郎左
 衛門は、コレハ／＼餘り意外の事故に、遂挨拶をも怠りし、
 粗忽の罪許し玉ひね、此の娘は、私の娘にて、少し仔細の有

此の娘は先年太神様より賜はりしお子なれば、御禮に御連れ申せしを、神様の御歡喜あり、天狗様の御連れなされしに相違あるまじ、左なくば此の娘か、斯く迄早く歩むべき筈はなし、又斯の草此の如斯様に新しく在る譯もなし、是れを實に神の御業なるべしと、言葉静かに物語れば、一同も然こそあらんなど、互に御神徳を稱へつゝ、ある中に、をふじは段々元氣附、氷呑みたしと呼びけれり、ソレ娘子か物言ひしすと、をふじの邊りに寄り集り、水や薬を與へつゝ、様子如何と問ひければ、おふじは擾しき聲を出し、先期三合目の小屋の前にて遊び居りしに長々高き伯父さんの來りまして、彼方に歩めと、私の手と引きて給はりしかば、私は伯父さんに附て、頂上までは登しが、其よ

り後は少しも覺へんはずとの物語りに、一同又も打ち驚き、我等か最前申せしに違はせ、天狗様の御連れ登り給ひしなるか、あら勿休なやと、先達始め一同は、口嗽手洗に身を清め、御前に向ひ、御禮の祈禱をばなしたりける。かくて一同は、主人に厚く禮を述べ、小屋を辞して山を下り此夜は須走村の、御師の許に一宿なし、明る日無事に狩野村に歸り着けり、其後年月數多經て、おふじは十七八才の頃、さる人の媒酌もて、隣村なる某に嫁し、夫婦の中も睦まじく、朝夕信心懈らず、家は次第に榮へける。又父太郎左衛門は尙更に、太神の御威徳の最も顯著なるに感じ、晝夜信心怠らき、今は早や六十路の阪を二つ三つ、越路に降れる白雪を、頭には載くもの、常に身体健康にして、今に至るも年

百十
々に、數多の講社を引連れて、富士へ登山なまければ、家門は愈増し繁昌しけるとぞ。」

直次郎の話

下總國印幡郡高野村に、秋葉五郎兵衛と呼べる富農あり、其先代より石高多く持ちて、清酒を醸造りて副業とせり。去れば代々、富士御師佐藤某（今の大鶴）が配札の時の宿なす事を定めとせり。頃しも嘉永三年の五月中旬の事なり。き、多くの農男は、朝未來より大麥の収入を爲さばやとて、束ねたるを運ぶもわれれば、穂を打ち敲くもありて、夏の中（なは）の永き日も、猶足らぬまでには忙はしき有様なりしが、申刻下りとなりぬれば、ハヤ大畧は整頓て、庭に残るは小山程、高く積上げたる麥藁のみにてありき。此に五郎兵衛の一子は、其の名を直次郎と呼びて、當年九歳になりけり。貧しき人は言ふまでもなく、鳥獸に至るまで、我が子にまさ

る可愛きものはあらざるに、別けて富貴の息子なれば、両親の寵愛淺からず、乳母よ護兒よどかしづかせ、手枕の透間の風だに厭はして、最大切に育てしか、此頃は成長するに従ひて、子供心に爲す事も、いつか既往と異りて、父母の眼には兎角危なくのみ見ゆる者から、ソレ惡戯は又劔呑ひと、朝より夕迄叱りつ賺しつして、片どき油断なし玉はぬも、吾が子をして僅かな疾ひにも罹らせじ、些の傷をも爲せまじと、夫れのみ氣遣ひ玉ふなるべし。親の心を子は知らずや、聲を便りに、晩岨を捕へんとて、辛ふじて高きに登り、花を見當に蝶々を打んとて、深きに陥る事な多かりき。此日も直次郎は、農夫等の麥打つ様なを見て、家の内外を駈け廻り、妨にもなり、遠くにも去りたりなぞして、遊

びつゝ、遙か向ふに高く積上げたる、麥藁の櫓を見て、何卒吾は彼の中に、隠れて見たきものなりと思ひしが、農夫等に遮られん事を恐れ居たり、ハヤ夕暮ともなりぬれば、農夫等も思ひく、其の場を去りて、他の仕事に取かゝりぬ。直次郎はコレ幸ひと麥藁近く躍り行き、人に姿を認められ、此愉快を缺きてはならじと、急に兩の手もて、藁を左右に掻き排き、ガサと其中に潜り入り、コハ面白や、樂しやな、吾此の中に在る事を、ヨモ他の人は見待らじ可笑緯よと獨り言息をひそめて居たりしが、無我無心なる小兒とて、睡るともなく、ツイトロく前後知らず又眼りけり。如斯處へ一人の下男、藁焼く時間の後れたり、主人の指圖なき中よ、ハヤ片付けて任舞んと、附木取る手も忙ハし

く、神ならぬ身は是非もなや、主人の令息が今いしも、膝ど
 なして熟眠する、此の麥藁へこそ火を放けたり。折しも吹
 来る一陣の微風に、ワラ／＼の音凄まじく、一度にド
 ット燃へ上れば、空には煙りの渦黒く、庭には火炎の波赤
 く、おそろしかりける。斗りなり、下男はよろこびの手を拍
 て、後をも見すして家に入る。少時にして火も次第／＼に
 衰へて、煙りも何時か薄らぐ頃は、日はハヤ山よ入相の鐘
 の音のみ諸鳥の啼にまでも響く。めり、五郎兵衛は、此時急
 に我が兒の居らぬを思ひ出し、直次郎や直次郎やと、二聲
 三聲呼びたれど、更に應へのあらぬ者から、必然彼れは遊
 びに氣を入れて、家に歸るを忘れ居るなるべし、能くもく
 言ひ付ケ置しに、なぞで歸りの遅かるぞとて、下男を呼び

尋ね出して早々歸りてよと命たり。焼野の雉子のそれな
 らで、子故に迷ふ親心、五郎兵衛が妻の、切りに物案じげに
 て、深き井の底に落ちもやせん、悍き馬の蹄に蹴られもや
 せんなど、ある事なき事取ませて、案じては造り、作りては
 案ずるも、亦無理ならぬ事ぞかし、夫婦は吐息つく／＼も、
 思はせ外の方を眺むれば、ふしぎや焼残りたる麥藁の其
 中より、一條の青火チャ／＼とこそは立ちたりけり、二人
 の胸先づ轟き、瞬もなきで見詰め居たりしに、中央ども見ゆ
 る小高さ灰の中よりも、ムツツと立ちしは、コレが是れ、夫
 と定かに別らねど、まがふ方なき我が兒の姿、コハ何事ぞ
 と見る中に、我が兒と見へし人形は、又もやドツカと火の
 中よ、倒れて見へきなりにける。二人は直に馳寄て、抱く手

遅しと顔打ち見やれば、正しく我子の直次郎にてありたり、
 夫婦の者の驚きは、何に比喩ん様もなし、いそぎ我家に抱
 き入れ、身体や如何よ、呼吸やあると、燈火の光りに顔打守
 れば、直次郎の左も睡さうなる眼を見開て、汗熱かりし熱
 かりと云ひたる様へ、顔色呼吸音聲まで、少しも常に異
 る事のあらざりし。二人の親はいふも更なり、下婢農夫に
 至るまで、互に眼と眼を見合せて、夢かと計り喜びたるも、
 實に理と知られたり。ヤガテ下婢は、清き水汲みもて来り、
 直次郎に進めければ、舌打ち鳴らして之を飲み、偕言へる
 やう、余は先刻夢藪の中へ潜り入り、人の知らぬを幸こと
 として、面白く思ひ居たるまで、覺へあれど、其後の事は
 一向も知り申さず、想之其儘睡りたるなるべし、其中四方



秋葉直二郎葉中ヨ起キ上ルタル圖

八方大火事となりて、余は逃るにも逃げられず、唯哀みて
居たりしに、彼方の空の雲の中より、幾重もく衣服召し
たる、美しき姫君様の来りまし、吾れ連れ行くべき處あり
と宣ひて、余をばトある奇麗なるお宮の内に導き玉ひぬ、
少時立と火も鎮りたれば、ハヤ歸れよと宣ひたり、余は仰
を畏み、家に歸らんとて立上りたるに、思ひきや麥藁の火
もまた消へ失せぬ、灰の中にてありければ、餘りの事と驚
愕て、其搦に倒れ轉びぬ、其時此處を傷したりと、耳の下
邊りに手を充つれば、釀酒人まで皆々が、聞く度毎に感歎
し、全く神の御助けぞと、言ふより外の事をなき中にも五
郎兵衛夫婦の者は、又もや一層驚きて、直次郎の充てたる
手を取除けて、耳の邊りをよく見れば、腐皮の赤くなりて、

少し腫れ上りたる様は、實にや倒れし時の火傷なるべし
 と知られぬ。五郎兵衛ハット起ちて、水場に至り、清水ヤオ
 ヲ汲上げて、鉢に附きし垢までも、洗ひ清むる心にや、丁寧
 に口を嗽ぎ終り、恭しく神殿の前に跪づき、正直心の石と
 金御神燈の数をさへ彌増して、拜禮せしが、暫しは頭も擡
 げ得せ、漸くにして涙の顔を上げ、偕て多くの人に向ひて、
 夫れ淺間の太神は、烈しき火の中に坐しまして、三人の御
 子を安く御分姫遊され玉ひき云々と、年頃來ぬる富士
 の御師さまの御話なりしが、如斯太神に坐しませば、今日
 も今日とて、我が兒が火中の大難を、救はせ玉ひしぞ尊け
 れ、然らざれば、彼様に、熾に燃る麥藁の中に熟睡せし彼兒
 の、何條助かり申すべき、サツ今頃は、不憫にも、身体は焦て

ふそろしき、目も當られぬ形なるべし、直次郎が美しき姫
 君様と言ひたりしは、恐れ多くも是ぞ此れ、富士の淺間の
 太神様に渡らせ玉ふ事疑ひなし、是と申をも、我が家の祖
 先の代より、年頃日頃御富士様を信心せし御神徳なるべ
 し、是を思へば我ながら、ソツトするまで有難やの事ども
 なり、各々然は感し玉はぬにや、と心の中の萬分一言葉し
 づかに陳べければ、御道理やといひ去のみ、主人も婢僕も
 一同に、言ひて盡せぬ心底を、兩の袂にしぼりけり。夫より
 後、五郎兵衛が家よては、一層富士の太神を尊みて、晝夜信
 心懈らき、直次郎をば、直ぐ其年の夏より御禮参として、毎
 年富士へ登山せしめたり。直次郎の耳の下には、今にやけ
 きの痕ありといふ。

富士山七ふしぎの事

(一) 頂上の金明水

土もなく草もなき、御頂上の焼石の其が間、直径一尺五寸許、深さ三尺許りの穴あり。最と清らかなる水は、常に其中に溜れり、諸人これを瓶に入れ、又は紙にひたして、御神符どなしけるよ、効顯眞に著し。東京邊の信徒は、小き樽なを携へ來り、一日に數百人づゝ汲み取れども、曾て涸きたる事なく、又此水は汲來りて、幾年を経るとも、腐るとなく、又如何なる早魃の年にても、いつも穴の中に満ち居りて、少しも嵩の減る事なしとぞ、世に難有御神水なり。

(二) 八嶺の笠雲

花の朝月の夕なぞ、長天にはたゞ一點の雲さえなく、風だに

吹でいともく静かなる時に方りて、御八嶺よりもや湧
出たりけん、白雲は動きもせで、御山の頂を蔽へり、里人等
は、明日頃には必ず雨の降るなるべし、御山は笠被りませし、
と、言ひてやそみぬ。曉に窓押開きて、外の方見遣れば、雲は
低く下りて、庭の梢すら見分かぬまで、雨は降りしきり
て、又ゆうべの眺めはあらぬかし。雨降る前の兆しには、必
ず此笠雲の見はるゝも、亦ふしぎなる事ともなり。

(三) 小御岳の奥の庭

小御岳神社の西一里半計の處に、御庭と稱する地あり。廣
袤概十餘丁四方もありて、風物凡て他と異れり。幾千本
の唐松木は、皆三百年以上の春秋を經れども、直經は僅に
一寸内外なり、曲りたる老幹は、三尺の高に出でず、參差た

る古枝は斜に地に接して、三四尺より七八尺に及びざる
おがせの垂れ下りたる様など、又千萬の奇巖は、大ひなる
ものど小さなものど、堅に横に打續きて、かのづと池の
形を作したる様など、實に神仙の遊集給ふ靈場なるべし。

(四) 大澤の石の瀑

大澤と申すは、富士山八百八澤の中にて、最も峻峻、最も大
ひなる溪谷にして、石の瀑と稱する邊は、溪幅凡十八丁餘
あり。常に大ひなる巖の頂の邊より落ち來り、碎けて百塊
となり、散じて千片となりたるもの、各々他の石を相衝突
して、至溪皆巖石の顛下ると、宛がら水の流下るゝ如く、其
音遠く雲際に響きて、凄じなんと言ん方なし。然れども古
來より、此大澤を越す者に限りて、未だ曾て負傷を受けた

るものなきは、單に神の守護給ふに因りてなるべし。

(五) 異人の降雨

世には、ふしぎなる事も數多けれど、是ほど奇なる事は餘もあらし。長天快く晴て、お山の中にも、一點の織雲すら見へず、ソヨどの風も吹ぬまでに、静かなる日に當りて、外國人の登山するあれば、一天俄に掻き曇り、吹き起る風と、降り出せ雨とは、凄じき音して、兩三日の間は、歌む時もありず。村人等は、お山は暴風雨なり、外國人は、孰れよりか登りしぞと言ふ、晴て後開けば、必ず其言の如くなりぞ。

(六) 裾野の御胎内

お山の北麓に、人の腹中の形状爲せる、奇き靈窟あり。入口の廣さ、七尺許にして、夫より五六間が間は、助骨の狀あり、

其奥より左に入るに、兒顛りとして、極めて狭き處あり、此處を後退して、又左に下れば、漸寬くして、乳房より乳の洩れ出るを見る、之を母の胎内と稱ふ、又別に父の胎内と名くる處あり。婦人若し分娩の時、方にりて、此靈窟に入りたる時、用ひし、櫻蠟燭等を、その室に置けば、必ず安くと出産といへる事は、古來より普く世人の知る所なり

(七) 吉田の火祭

御山の北麓、吉田村(今福地村と稱す)に鎮り坐す、富士嶽神社の御祭典には、毎年舊曆七月廿一日夜(驛の中央に戸々皆長さは二間半より、三間半に及び、太さは五尺より、八尺にも至る程の、大松明を燃す、往古より、如何なる大風ありても、人家を焼の災ひなく、暴雨ありても、火氣の衰へた

る事なし。又家々にては、此神火の消ゆると消へざると、燃
方の速きと遅きに依りて、一周年の吉凶を卜ふに、熱れも
速ふことなしといへり。實に珍らしき火防の御祭禮なら
ずや

富士の神徳終

跋

富嶽ハ本邦第一ノ高山ニシテ宇内無比ノ靈山タリ即
チ神靈ノ憑ル所正氣ノ鐘ル所卓然トシテ東海ニ秀テ
巍然トシテ千秋ニ聳ユ世以テ國鎮トナシ國民舉テ信
仰スルノ厚キモ亦宜ナラスヤ是ヲ以テ富士ノ神徳ヲ
傳フルノ書極メテ多ク富嶽ノ威靈ヲ辨スルモノ役抄
カラス然リト雖モ概チ杜撰粗漏ノモノ多クシテ殆ン
ド信スベキモノナキカ如シ偶々學者ノ手ニ成ルモノ
有リト雖モ文章高致意義深遠ニシテ啻ニ淺學ノ徒ヲ
シテ隔靴ノ歎ヲ發セシムル而已ナラス或ハ文飾ニ流
レテ事實ヲ失スルノ嫌アルヲ免レス未タ以テ神徳ヲ

世ニ傳ヘ威靈ヲ千歳ニ揚グルニ足ルモノアルヲ見ス
是予カ毎ニ遺憾トスル所ナリ予カ教友羽田小佐野ノ
二子屬者一書ヲ編シ名ツケテ富士ノ神徳ト云フ予之
ヲ閱スルニ材ヲ寶歴ノ上ニ徵シ文ヲ小説ノ態ニ取ル
是ヲ以テ事ニ虚偽ノ跡ナク文ニ拮屈ノ痕ヲ留メス斯
書アリ而後始メテ富嶽ノ神徳威靈ヲ世ニ傳フルヲ得
ベシ斯文アリ而後始メテ童幼婦女ヲシテ又隔靴搔痒
ノ歎ナカラシムベシ予斯道ノ爲メニ此編ノ出ルヲ好
ミシ則チ一言ヲ卷末ニ辨スト云爾

富士岳神社祠官

明治廿二年二月

藤原俊學

稟告

小生等此度富士の神徳出版致候處各教諸名家及大方諸君
の御賛成を得嗣で第二篇發行可致旨切に御勤めに預り感
佩の外無御坐候仍て近日第二篇を著作致し中興元祖食行
身祿尊師御肖像及御一代記を始め顯著なる神徳を列叙致
度候に付眞に御利生を受けたる事實御承知の御方は報恩
の爲めと被思召如何なる文体にても宜敷候間左記の場所
に宛て御申越被成下度候然れば出版の上御禮として製本
一部進呈可仕候也謹言

山梨縣南都留郡福地村

羽田宿直 同拜

小佐野文炳

本篇植字正誤表

頁行	元字	訂正	頁行	元字	訂正	頁行	元字	訂正
六四	極	拯	三三九	光國	光國	七三七	去	失
八一	遊集	遊萃	三九四	昶め	賭て	七七二	善	好
九七	デハ	デ	四四八	瘦瘦	瘦衰	七九一	とう	ト
一一五	奇シク	奇シキ	四六六	吳だ	吳た	九三八	ろか	腹這
一三七	あらえか	あらたか	四八一	うせつき	うせつり	九四五	盤	轟
一六五	餉 <small>くわん</small>	餉 <small>くわん</small>	四九一	りぬ	りぬ	九九九	善	良
一八一	幸 <small>さい</small> ヒ	幸 <small>さい</small> ヒ	五三九	丸室	丸寶	一〇六一	よしよし	よしよし
全	ナ、ヤ	ナ、ヤ	五四九	操	操	一二五	無敵ハ	無敵ハ
二四七	ベシ	ベシ	五六七	ハア	ハテ	全	六	いと
全	みよら	こよら	六六一	後口	後ろ			よと
二五一	綱義	綱吉	六九五	瀧吉	瀧藏			

明治廿二年一月三十日印刷
 全 年二月廿一日再版
 全 年二月廿一日再版
 全 年二月廿一日再版

定價金廿五錢



著作發行者兼

小佐野文炳

同

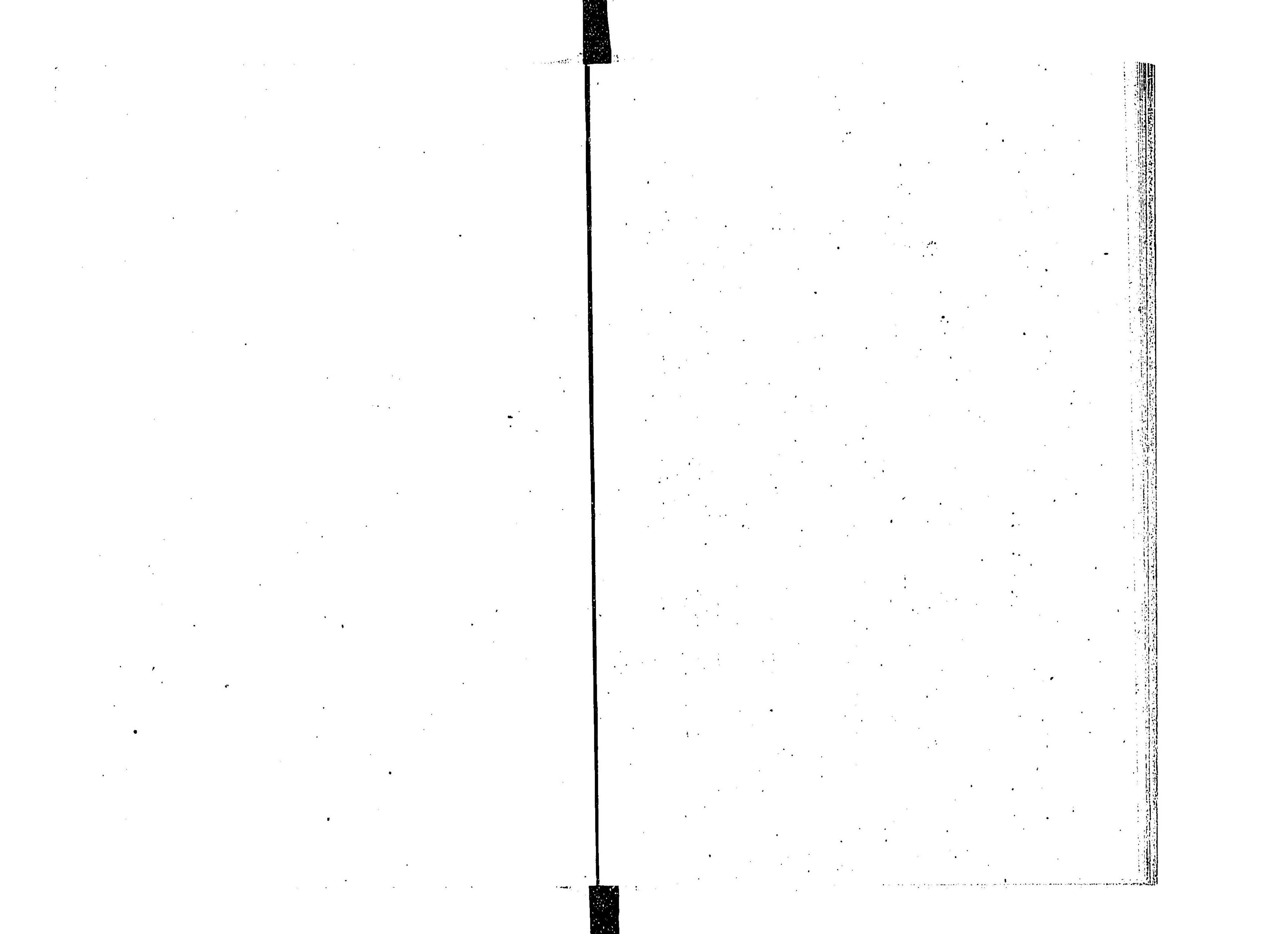
羽田宿直

製本發行人兼

東京神田區松枝町二十五番地寄留
 東京々橋區三十間堀二丁目壹番地
 博文堂原田庄左衛門

印行者

東京々橋區築地二丁目十五番地
 桑原八郎次



194



特22

583

富士の神徳

[再版]

国立国会図書館

014587-000-2

特22-583

富士の神徳

小佐野 文炳
羽田 宿直 / 著

M22

ABB-1004

